

令和5年度

中英研会報

第82号

東京都中学校英語教育研究会

令和5年度 ― 行 動 目 標 ―

グローバル化に対応した教育環境づくりを進めるため、国は小・中・高等学校を通じた英語教育全体の飛躍的な充実を企図し、社会からも大きな期待が寄せられている。学習指導要領（平成29年3月告示）では、令和2年度に小学校第3・4学年の外国語活動、第5・6学年の外国語科が開始され、令和3年4月には中学校学習指導要領が全面実施された。東京都中学校英語教育研究会は以下の行動目標の下、中学校英語教育を一層の充実・発展させ、持続発展する社会を支える人材を育成する。

1. 組織の充実とその活性化を図る。

- (1) 都中英研の活動がより充実したものとなるよう、組織全体の見直しを継続的に行う。
- (2) 都中英研の各種事業により多くの教員や学校が参画できるようにする。集合型研修、オンライン研修や会議それぞれの利点を生かし、効果的、効率的な組織運営により教員の学びを充実させる。
- (3) 各地区の幹事と連携を密にして、多くの優れた指導力や実践を広く共有する。

2. 人材の発掘とその育成に努める。

- (1) 有能な人材を発掘し、リーダー層の育成する。英語教員全体の資質向上を図る。
- (2) 英語教員の資質向上を目指した研修事業を企画・運営する。次世代の英語教員を育成する。
- (3) 授業研究を活発に推進する。個人として、英語教員として、組織の一員としての充実を目指す。個人の目標、組織の目標を互いに協力して達成し、地域や社会にも貢献する人材を育成する。

3. 英語教育に関わる関係機関や関係団体との連携を強化する。

- (1) 本学年で実施のスピーキングテスト（ESAT-J）を始めとする都の事業において、東京都教育委員会と連携する。東京方式少人数・習熟度別指導を充実させ、生徒の英語力を高める。
- (2) 「東京都小学校外国語教育研究会」、「東京都高等学校英語教育研究会」他関連機関との連携を進め、小・中・高・大学等の学びを円滑に接続できるようにする。

4. 調査・研究の充実を図る。

- (1) 学習指導要領の趣旨を踏まえながら、組織的な調査・研究を推進する。
- (2) 英語教育に関わる基礎的事項および発展的事項等についての調査・研究活動を行う。
- (3) 英語教育に関わる今日的かつ実践的な課題についての研究活動を行う。特に小学校における外国語活動、外国語科との関連に留意した研究を充実するとともに、GIGAスクール構想による生徒一人1台端末を活用した授業について研究活動を行い授業改善に繋げる。
- (4) 生徒の英語によるパフォーマンスを高めるための取組、特に英語「話すこと[やり取り]」「話すこと[発表]」の評価に関する取組についての調査・研究を推進する。

5. 英語教育に関わる各種情報の収集・発信を進める。

- (1) 様々な広報媒体を活用して、各種情報の発信を行う。
- (2) HP、SNS等の活用を図り、それを通して各種情報の受信・発信を行う。
- (3) 各地区との連携を進め、情報の共有化と相互協力による事業を推進する。

目 次

●英語教師としての充実、個人としての充実はどちらも大切……………	平岡 栄一…	1
●今こそ考えたい「正確さ」の指導……………	阿野 幸一…	2
●東京都教育委員会の取組		
東京都における「グローバル人材育成」……………	軽部 智之…	4
①令和5年度 中学校英語スピーキングテスト		
(ESAT-J YEAR 1 (Y1) 及び ESAT-J YEAR 2 (Y2)) の実施……………	山田 道人…	6
②都立高校生海外派遣研修について……………	鈴木 基成…	9
③生徒の英語によるパフォーマンスを高めるための		
連絡協議会・授業力向上セミナーの実施……………	早川 裕之…	11
●東京都教職員研修センターにおける		
外国語（英語）に関する研修について……………	杉山 博亮…	14
●実践研究		
(1)英語学芸大会 Play の部 第1位		
Banana Taro 誕生！九段中等18回生の歩み！……………	阿部 公一…	16
(2)英語学芸大会 Speakingの部 A 第1位		
逆境を乗り越えた先で得たもの……………	清水さやか…	17
(3)研究部 令和4年度研究発表について……………	前田 宏美…	18
(4)東京教師道場での取組 令和2年度中学校1班の場合……………	辻 賢哲…	19
(5)第47回関東甲信地区中学校英語教育研究協議会		
第3分科会（東京都代表発表）報告……………	佐藤 順一・渡邊 良亮…	21
●各部報告		
・総務部報告……………	板垣 繁…	24
・事業部報告……………	横山 達也…	25
・調査部報告……………	荒川 高広…	26
・研究部報告……………	溪内 明…	27
・プロジェクトチーム部報告……………	佐藤 順一…	28
・出版部報告……………	今本由美子…	28
●研究大会報告		
・大都市公立中学校英語教育研究会連絡協議会（広島大会）……………	畠山 芽含…	29
・全国英語教育研究団体連合会総会（全英連 愛媛大会）……………	難波 浩明…	30
・関東甲信地区中学校英語教育研究会連絡協議会（群馬大会）……………	板垣 繁…	31
●各地区の活動状況……………		33
●中英研事業報告……………		59
●中英研会則……………		60
●名簿……………		62
●あとがき……………		66

英語教師としての充実、個人としての充実はどちらも大切

会 長 平 岡 栄 一
(葛飾区立常盤中学校)

平素より、東京都中学校英語教育研究会（都中英研）の活動へのご理解とご協力を賜り深く感謝申し上げます。多くの皆様の御指導、御助言、ご尽力をいただき、おかげさまで令和5年度の研究や実践も大きな成果を結んでいます。

今年度の活動は対面にて行いつつ、オンラインの利便性も活用しました。主な事業として、6月に定期総会、「感謝する会」、8月に研究部、事業部、調査部、プロジェクトチーム部（PT部）それぞれによる5つのワークショップ（参加合計434名）、10月に第62回大都市公立中学校英語教育研究会連絡協議会（広島大会）、11月に第73回全国英語教育研究大会（全英連愛媛大会）、第47回関東甲信地区中学校英語教育研究協議大会（関プロ栃木大会）、「都中英研だより第77号」発行、2月に研究部の公開授業・研究発表で「語いと英語教育（46）」発行、第38回事業部「授業力アップ研修会」、PT部研究授業・冬季研修会が行われ、3月には「令和5年度 中英研会報 第82号」が発行されます。また英語学芸大会は、11月に第76回英語学芸大会（オンライン開催・各校3エントリーまで）、12月に第76回英語学芸大会（集合開催・各地区1エントリー）が実施されました。

こうした活動は各部員、地区幹事を始めとした全ての都中英研会員の創意工夫によりつくられていきますが、その基盤はもちろん日々の授業にあります。第4期教育振興基本計画（2023.6）では、VUCAと言われる、Volatility（変動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性）の時代において「持続可能な社会の創り手の育成」と「ウェルビーイングの向上」の2つのコンセプトが掲げられ、ウェルビーイングとは「身体的・精神的・社会的に良い状態にあること」であり、「多様な個人それぞれが幸せや生きがいを感じる」ことと提案されました。では、私たち英語教師が、これを毎日の授業で実現するにはどうしたら良いのか…私見を述べます。

授業は教師や生徒等が協働でつくります。生徒は教師から最大の効果を引き出し、自身の学びがより大きくなるように行動します。教師は生徒の学習意欲を高めるさまざまな仕掛けをしますが、授業の準備は未確定の部分も残しておき、生徒が工夫を加え、また生徒の反応から教師が調整できるようにします。但し、授業の目的や、扱う内容、授業終了時の生徒の状態と笑顔は十分にイメージしておきます。すると授業の大きな流れができ、焦点が明確になります。生徒は自身で目標を定め、省察して学びを自分で運用し、記憶します。

生成AIは効果的に使用します。生徒や教師の意欲が高まり、英語力や思考力が高まり、ウェルビーイングが向上するようにします。語彙やフレーズ、文法事項等において教師が知らない内容を生徒が使い始めたら、教師もその機会に学びます。生徒も教師も「これは英語で何と表現するのか？」と常に考え、表現したい内容（使用語彙の制限なく）自由に、自ら見つけた語彙等で伝える英語学習はとても魅力的で、生徒も教師も授業中に英語力を高めることができ大変効率的です。そこにユーモアもあれば、授業の魅力はさらに大きくなります。また学力調査やESAT-Jなど、国、都、各自治体の施策はその目的や背景を正しく主体的に把握し、各自のアイデアで工夫して、存分に活用して学力向上につなげます。

さて、皆様はどのような授業で自身や生徒のウェルビーイングを高められたいですか？

都中英研の皆様におかれましては、各自のすべきこと、また実現したいこと等を互いの協力により、ゆったりとした温かい気持ちで堂々と達成し、組織の一員としてまた個人としても充実した日々を今後もお送りいただけたらと願います。都中英研での研修もこれからも皆様と共に楽しみながら創れたらと思います。何卒よろしく願いいたします。

今こそ考えたい「正確さ」の指導

文教大学 教授 阿野 幸一

言語活動を通して生徒のコミュニケーション能力を育成するために、それぞれの学校で生徒が生き生きと英語を使って活動を行う姿を拝見し、英語の授業改革が進行していると感じ、うれしく思っている。学習指導要領が目指す生徒の英語力を向上させる取組の成果と言える。その一方で、生徒はたくさん話したり書いたりするようにはなったが、英語の正確さの面では課題が多いとの声が聞かれるのも事実である。

1 「正確さ」は説明や問題演習で？

評価の観点の一つ「知識・技能」という枠組みからもわかるように、生徒の英語表現における正確さは、実際に英語を使用する中で正しく適切に用いることが求められている。教師が「正確さに課題がある」と判断するのは、生徒が話したり書いたりした英語に誤りが多く見られる時などではないだろうか？にもかかわらず、正確さの指導として目にするのは、教師による文法の解説や、文脈と切り離れた短文レベルでの問題演習が多いことにも留意する必要がある。このような指導だけに頼っていては、正確に表現するための「知識」を与えることはできるが、我々教師が生徒に求める「技能」としての正確さを身に付けることはできないことは明らかであろう。

2 「正確さ」は「できていない」ことで測る？

生徒の英作文に次のような文章があったら、どのように「正確さ」を評価するだろうか？過去形を学習した後に書いた英文である。

I went to Yokohama with my family yesterday. We eat Chinese food in Yokohama Chinatown. After that, we went shopping and I buy a new bag. I had a great time.

動詞が5回ほど使われている。そのうちの3回は正しく過去形を使っているが、2回は動詞の活用ができておらず、現在形で表現している。ここで、この生徒の正確さを、「3回正しく使えた」とプラスに評価をするか、それとも「2回使えなかった」ことでマイナスに評価をするだろうか？

この生徒は、間違いなく「過去のことを表現するときには、動詞の過去形を使う」という知識は持ち合わせているはずである。この知識を活用して、3回は成功しているのである。つまり、半分以上は正確に表現できており、まずこのことを評価して、さらに精度を上げていく指導をしたいものである。正確さにおいて常に100パーセントを求めることは、生徒の発話しようという意欲を減退させるのみならず、「間違いを繰り返しながらできるようになっていく」という言語習得理論にも反するものになってしまう。「正確か」「正確でないか」ではなく、「どのくらい正確に表現できるようになっているか」、そして「少しずつ正確さを向上させていく」という指導を忘れないようにしたい。

3 教科書を活用した「正確さ」の指導

2年間ほど英語科と一緒に授業改善に取り組んだある中学校での実践例を紹介したい。この中学校では、パフォーマンステストの一つとして、教科書本文を用いたりリテリングテストを行っている。多くのリテリングでは、教科書本文の内容に沿って、イラスト

トを用いながらストーリーを自分の言葉で伝える活動であるが、この中学校で行っているリテリングは、ストーリーの内容を伝えながら、自分の考えや感想を入れたり、聞き手のクラスメートに対して質問を投げかけて即興的なやり取りをしたりしている。このリテリングテストのループリックは「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の2つの観点のみとして、「知識・技能」は入れていない。一時期、試験的に一つの学年で「知識・技能」を観点に入れてみたところ、誤りを気にして事前に原稿を作って暗記する生徒が増えて、発話量は圧倒的に減ってしまい、本来のねらいである即興的な発話がなくなってしまった。そこで、再度「知識・技能」を観点から外したところ、再び自由に英語を使って表現しようという姿勢を見せるようになった。どの学年でも、授業中に生徒が笑顔で英語を生き生きと使う姿が見られ、書く活動においても、ある一定の正確さをもって多くの英文で表現することができている。

ではこの中学校ではどのように英語の正確さの指導をしているのであろうか？それは教科書の音読である。英語科の先生方は「教科書本文は正確な英語で書かれている」という共通理解のもと、教科書の英語を生徒の頭に残し、生徒が自分のものとして活用できるようにするための指導を通して、表現面での正確さを向上させている。通常の音読活動に加えて、覚えさせたい単語を隠しての音読や、動詞を原形のまま記載して変化させながら音読をしたり、日本語訳だけを見て英語で表現したりと、様々な音読指導を取り入れている。その結果として、リテリングの際にも、内容を伝えようと英語で表現をする中で、次第に正確な英語を使用できるようになってきた。新出単語についても、単にリストに羅列された日本語訳を覚えるという機械的な練習をやめて、本文とともに記憶に残す指導を意識し、いわゆる単語の小テストは一切行っていない。それでも多くの生徒が高い英語力を身に付けているのは、他ならぬ教科書本文の音読による「正確さ」の指導と言える。

東京都中英研のプロジェクトチームでは、令和4年度と5年度に音読に焦点を当てた研究をおこなっている。最近の全国各地の研究テーマが、「小中連携」「言語活動」「3観点による評価」などが中心となっているが、小学校の学びをつなぎ、言語活動を通して英語力を培っていく英語教育の中だからこそ、音読をテーマとするプロジェクトチームの研究成果に大いに期待している。

4 中間指導における「正確さ」の指導

全国の学校の英語の授業で、ペアになったのsmall talkが盛んに行われている。1度目のsmall talkが終わった後に、「言いたかったけど、言えなかったこと」をクラス全体で共有し、教師の支援を受けながら生徒たちが既習事項を駆使して思考をめぐらして考えている姿は、英語の表現力を養う上で貴重な学習機会と言える。教師が表現を教えてしまったり、生徒がタブレットの翻訳機能を使って難しい単語を調べてしまったりすることで単に知識を得ることとは異なり、表現力の育成という意味で大きな効果が期待できる。

ただ一つ、こうした指導で気になるのは、「言えなかった言い方を知る」の指導で終わってしまっていることである。つまり、「どのように言ったらいいか」の知識は得ているが、実際に「言うことができる」という技能までの指導が行われていないことである。「言いたかったけど、言えなかった」であれば、「言うことができる」までが指導になるはずである。「分かって終わり」ではなく、言い方がわかった段階で、クラス全体や個人でのリピート練習をすることで、2回目以降のsmall talkで活用できるようになり、そうした実際の使用経験を経て定着していくものである。このあたりの配慮が、生徒の発話における正確さに貢献できることを忘れないようにしたいものである。

東京都における「グローバル人材育成」

東京都教育庁グローバル人材育成部 国際教育企画課長 軽部 智之

1 東京都が目指すグローバル人材育成

現在、様々な分野でグローバル化が進展している中、多様な人々が共生し、互いを認め合う東京の実現に向けて、これからの時代を生きるこれからの子供たちには、自己を確立しつつ、他者を受容し、多様な価値観をもつ人々と協力・協働しながら課題を解決する力が求められる。また、多くの外国の人々と交流する機会が増えていく中、自らすすんで積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度や豊かな国際感覚を醸成する必要がある。

東京都教育委員会は、グローバル人材育成の目標の設定とその目標達成への手段を明確にした「東京グローバル人材育成計画'20(Tokyo Global STAGE'20)」(平成30年2月)を踏まえ、令和4年3月、都内公立学校において、グローバル人材育成に向けた取組を推進していくためのガイドラインとなる「東京グローバル人材育成指針」を策定した。

2 「東京グローバル人材育成指針」

■主な内容

- 学校において学習・教育活動を進める上での考え方
- 小・中・高等学校を通して育成したい資質・能力
- 期待される子供たちの姿(資質・能力)
- グローバル人材育成の視点からの教科横断的な取組例
- 中学校英語スピーキングテストやTOKYO ENGLISH CHANNEL(※)など、授業等で活用できる東京都の施策
- ※TOKYO ENGLISH CHANNEL:小学生から高校生までが英語を自学・自習することができるウェブサイト。動画とオンラインイベントの2つの要素で構成。

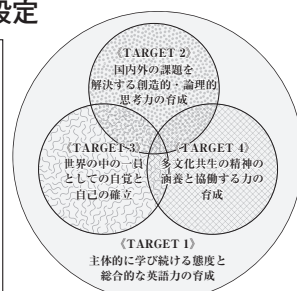


小・中・高等学校を通して育成すべき資質・能力を4つのTARGETとして設定し、主体的に学び続ける態度と総合的な英語力の育成を基盤としながら、各TARGETを相互に連携させた教育を推進していくことを目指している。

3 4つのTARGETによる東京型グローバル人材育成モデルの設定

■4つのTARGET

- 【TARGET 1】主体的に学び続ける態度と総合的な英語力の育成
- 【TARGET 2】国内外の課題を解決する創造的・論理的思考力の育成
- 【TARGET 3】世界の中の一員としての自覚と自己の確立
- 【TARGET 4】多文化共生の精神の涵養と協働する力の育成



【4つのTARGETのイメージ図】

図で示す最も大きいサークルTARGET 1「英語力・主体性」を基盤として、TARGET 2「創造性、論理力、思考力」、TARGET 3「自己の確立」、そしてTARGET 4「多文化共生」を育成する。

TARGETを育成するためのアプローチとして、まずは学校での取組がある。学校での取組をさらに充実させるために、東京都教育委員会のグローバル人材育成の施策を学校の取組と関連させてグローバル人材を育成していく体系が、「東京型グローバル人材育成モデル」である。

小学校から高等学校まで一貫して4つのTARGETの育成を目指し、「世界を視野に新しい時代を切り拓く人材の育成」を推進していく。

4 グローバル人材育成部の設立

令和5年4月、東京都教育委員会は、グローバル人材育成部を設立した。

本部では、世界で活躍するグローバル人材の育成に向けて、4つのTARGETの育成に係る様々な施策を実施し、小中高を通じた英語教育と国際理解教育を推進している。

課	担当	主な事業
国際教育企画	国際教育企画	●国際教育企画・調整 ●JET・ALT配置 ●MOU（教育に関する協定締結） ●Tokyo Global Student Naviの活用促進
	国際教育推進	●オンライン英会話の実施 ●英語資格検定試験受験支援 ●英語スピーキングテスト（ESAT-J）の実施 ●指定校(GE-NET20・英語教育研究推進校)
	日本語指導	●日本語指導の基本方針の策定 ●受入状況等調査 ●児童・生徒用テキスト・動画等の活用促進 ●多文化共生スクールサポートセンター等の支援事業
国際交流教育	国際交流教育	●都立高校生等の海外交流事業 ●東京体験スクール ●教員海外派遣研修 ●海外高校生招聘プログラム
	国際教育事業	●TOKYO ENGLISH CHANNEL ●TOKYO GLOBAL GATEWAY ●TEP-CUP（東京都高等学校英語プレゼンテーションコンテスト）

いつでも、どこでも、誰でも、生きた英語に触れられる、東京都教育委員会の外国語教育・国際理解教育に関するポータルサイト「Tokyo GLOBAL Student Navi」で、各事業に係る情報を掲載している。

<https://global-navi.metro.tokyo.lg.jp/>



次頁より、東京都教育委員会の令和5年度のグローバル人材育成に関する主な取組を紹介する。

令和5年度 中学校英語スピーキングテスト (ESAT-J YEAR 1 (Y1) 及びESAT-J YEAR 2 (Y2)) の実施

東京都教育庁グローバル人材育成部 国際教育推進担当課長 山田 道人

東京都教育委員会は、小・中・高を通じた英語教育や国際教育に関する施策を重層的に展開することで、世界で活躍できる人材の育成に向けた取組を推進しており、その取組の一環として、中学校英語スピーキングテスト（ESAT-J）を実施している。

本事業は、生徒が中学校の授業で学んだ内容の定着を確認し、次の目標の設定や学習改善に役立てること、義務教育での学びを高校への学びへとつなげることを目的としている。

3年間を通じた英語指導の充実・改善を行い、英語の「話す」力を高めるため、令和5年度より、中学校第1学年及び第2学年においても実施する。以下に概要及びサンプル問題の一部を紹介する。

1 テストの名称

(1) 中学校第1学年（義務教育学校第7学年）

ESAT-J YEAR 1 (Y1)（イーサットジェイ・イヤー・ワン）

(2) 中学校第2学年（義務教育学校第8学年）

ESAT-J YEAR 2 (Y2)（イーサットジェイ・イヤー・ツー）

2 ESAT-J YEAR 1 (Y1) 及びESAT-J YEAR 2 (Y2) の内容

(1) 出題方針、出題内容

ア 出題方針

中学校の教育課程に基づく学習の成果としての「話すこと」の力をみる。

イ 出題内容

(ア) 中学校学習指導要領(外国語)における「話すこと」に準拠した内容とする。

(イ) 知識・技能の習得や、思考力・判断力・表現力などをみる。

(ウ) 出題範囲

教科書名	ESAT-J YEAR 1	ESAT-J YEAR 2
BLUE SKY (啓林館)	p.93 (Project 2) まで	p.90 (ジェスチャー) まで
Here We Go! (光村図書)	p.103 (SING A SONG ②) まで 及び帯教材Let's Talk!	p.94 (SING A SONG ②) まで 及び帯教材Let's Talk!
NEW CROWN (三省堂)	p.112 (グリーティングカード を送ろう) まで	p.90 (Project 2) まで
NEW HORIZON (東京書籍)	p.100 (Small Talk! ②) まで	p.104 (Let's Listen ⑥) まで
ONE WORLD (教育出版)	p.100 (Reading ②) まで	p.94 (Reading ②) まで
Sunshine (開隆堂)	p.94 (Power-Up 5) まで	p.88 (Word Web ④) まで

(2) 実施方法

事業者が用意するタブレット端末及びヘッドセット等を用いて、実施する。

(3) 試験時間

説明時間を含め、一単位時間（50分）を基本とする。

(4) 問題構成及び評価の観点

ア 問題構成

「サンプル問題 ESAT-J YEAR 1（解答例あり）（中学校1年生対象）」及び「サンプル問題 ESAT-J YEAR 2（解答例あり）（中学校2年生対象）」のとおり

・「サンプル問題 ESAT-J YEAR 1（解答例あり）（中学校1年生対象）」

https://www.kyoiku.metro.tokyo.lg.jp/school/content/files/esat-j/231214_sample_questions_year1.pdf



・「サンプル問題 ESAT-J YEAR 2（解答例あり）（中学校2年生対象）」

https://www.kyoiku.metro.tokyo.lg.jp/school/content/files/esat-j/231214_sample_questions_year2.pdf



イ 評価の観点

(7) コミュニケーションの達成度

(4) 言語使用

(ウ) 音声

(5) 画面表示

タブレット画面上の試験問題の指示文は、ルビ付きとする。また、イラストは白黒表示とする。

(6) 結果返却

令和6年4月から5月末までの期間に、結果と学習アドバイスを返却する。

3 サンプル問題について

ESAT-J YEAR 1及びESAT-J YEAR 2は、3年生が受験するESAT-Jをゴールとして設計されており、4パートで構成されている。

【Part A 音読の問題】掲載省略

【Part B 会話の問題】 Part Bは、会話の問題である。相手との会話の中で、相手からの質問に答えたり、相手に質問したり、自分ごととして相手とやり取りするような問題となっている。

[今回掲載はESAT-J YEAR 1]

(Q1及びQ2準備時間なし、質問の解答時間それぞれ15秒以内)



Q1. What month is your birthday?

解答例

・ My birthday is in November.

・ It's in March.

Q2. Which season do you like?

解答例

・ I like spring/summer/autumn/fall/winter.

・ My favorite season is spring/summer/autumn/fall/winter.

Q3. レオンに対して、次のことを質問してください。

「好きなスポーツ」

(準備時間15秒間、質問時間10秒以内)

解答例

- ・ What sport(s) do you like?
- ・ Which sport(s) do you like?
- ・ What is/are your favorite sport(s)?

【Part C イラストを説明する問題】 Part Cは、1枚のイラストについて説明する問題である。



ESAT-J YEAR 1では、物の名称や位置関係を、ESAT-J YEAR 2ではそれらに加えて、誰が何をしているかといった、動作についてできるだけ多く説明する問題となっている。

[今回掲載はESAT-J YEAR 2]

(準備時間20秒間、解答時間45秒以内)

解答例

- ・ Some/Three textbooks are on the desk.
- ・ The/A bag is by the table.
- ・ The/A poster is on the wall.[Three posters are on the wall.]
- ・ The/A student/boy is writing (on the blackboard).
- ・ The/A student/girl is carrying/moving the/a desk.
- ・ The/A boy/girl/student is cleaning (the floor/the classroom).
- [Four students are cleaning.]

【Part D ナレーションをする問題】 Part Dは、3枚のイラストについて説明する問題である。



ESAT-J YEAR 1では生活習慣を説明する問題、ESAT-J YEAR 2では先週の出来事を説明する問題となっている。

[今回掲載はESAT-J YEAR 2]

(準備時間30秒間、解答時間50秒以内)

解答例

〈Last week …〉

- ・ I went to the library. My friend came, too.
- [My friend came with me.]
- ・ I used the computer. My friend found a book.
- ・ Then, I read a book and my friend did his homework.

サンプル問題で示しているように、ESAT-J YEAR 1及びESAT-J YEAR 2では、生徒たちが話してみたい、挑戦してみたいと前向きに取り組み、受験後に新たな目標設定ができるようなテストを目指している。

都立高校生海外派遣研修について

東京都教育庁グローバル人材育成部 国際交流教育課長 鈴木 基成

1 グローバル人材育成の必要性・社会的背景

様々な分野でグローバル化が進展している中、東京が継続して発展していくためには、東京に暮らす全ての人々が多様な文化を受け入れ、分け隔てなく自己の能力を発揮できる社会を作り上げていく必要がある。これはまた、年齢、国籍、文化の違いや障害の有無等にかかわらず、あらゆる人々が互いの人権を尊重し合い、共に力を合わせ生活する共生社会を実現していくことである。

このため、これからの時代を生きる子供たちには、自己を確立し、他者を受容し、多様な価値観をもつ人々と協力・協働しながら課題を解決する力が求められる。また、多くの外国の人々との交流機会が増えていく中、自ら進んで積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度や豊かな国際感覚を醸成する必要がある。

2 東京都教育委員会の国際交流・「生徒の海外派遣研修」に関する取組

東京都教育委員会では、世界を視野に、新しい時代を切り拓く「グローバル人材」の育成を目指し、様々な事業を展開しており、その中の一つに、都立高校生等を対象とした「海外派遣研修」事業を実施している。本事業では、学校での学びを現地ならではの経験を通じて実践的に深められるよう、現地教育機関や大使館等と連携し、1週間程度の東京都教育委員会独自の研修プログラムを企画・実施している。

3 令和5年度の「海外派遣研修」の取組

令和5年度は、これまで交流機会の少なかった中東地域や北欧地域を含む10か国以上に約200名の生徒を派遣した。

現在、都立学校では、「東京グローバル人材育成指針」等に基づき、各学校で国際交流の取組を進めており、東京都教育委員会は、今後、多くの都立学校で国際交流の取組が促進される契機となるよう、各学校の取組を支援する観点から、国際交流に意欲のある学校を中心に派遣校を決定した。海外派遣研修に参加した生徒は、帰国後、参加した成果を広く、参加していない生徒にも還元するため、参加校や東京都教育委員会主催の成果報告会で、成果発表を行っている。

4 進路指導の際の「都立学校の魅力ある取組」としての発信・指導

区市町村の中学校の先生方においては、進路指導の際、以上のような国際交流の取組についても、「都立」に進学する際の魅力の一つとして、情報を発信していただきたい（以下の写真は、交流の様子的一部分である）。



現地大学ワークショップ



施設見学



異文化体験



ポッチャ交流



現地高校生との交流

5 教員等の海外派遣研修

(1) 事業の目的・ねらい

東京都教育委員会では、海外大学等で最新の指導法や教育制度等を学び、国際的な視野をもった児童・生徒の育成に向けた指導力を高めるため、教員の海外派遣研修を平成26年度から実施している。

本研修は、英語科教員だけでなく、小・中学校・都立学校の教員を対象とし、海外派遣後は、「生徒の英語によるコミュニケーション能力の向上」や「生徒の探究する力の育成」等に繋げることを期待している。また、研修成果を自校や自地区の他の教員に広め、都全体でグローバル人材育成の指導力等の向上を図ることを目的としている。

(2) 令和5年度 of 取組

令和5年度は、約100名の教員をカナダ・オーストラリア・ニュージーランドの大学に1か月間（7月下旬から8月下旬）派遣した。現地研修の前後、オンライン研修も併せて行い、12月に成果報告会を行った。成果報告会には、海外派遣研修に参加した教員だけでなく、国際交流等に関心の高い先生方にも参加いただいた。

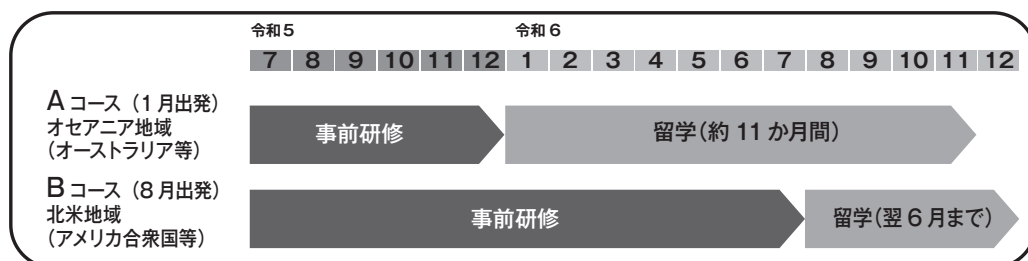
6 次世代リーダー育成道場

(1) 事業の目的・ねらい

次世代リーダー育成道場は、グローバル化が進む中、将来、様々な場面や分野で活躍し、日本や東京の未来を担う次代のリーダーを輩出するため、都立高校生等を対象とした海外留学支援事業である。事前研修、約11か月間の海外留学、事後研修を通して、海外で通用する英語力や広い視野、世界に飛び出すチャレンジ精神、課題解決能力等を育成することを目的としている。

(2) プログラムの概要

本プログラムは（1）事前研修、（2）留学、（3）事後研修、で構成され、留学の開始時期により、A、B二つのコースを設定している。



7 令和5年度研究開発委員会「使える英語力」部会

令和5年度の研究主題は、3年間の計画的なパフォーマンステストの実施による「使える英語力」の育成である。グローバル人材の育成に向け、生徒の英語によるパフォーマンスを高める指導の重要性が高まっている。一方、高等学校では学年が進むにつれて、スピーキングテストの実施状況が下がっていく傾向がある（令和4年度公立高等学校における英語教育実施状況調査）。この状況を踏まえ、「話すこと」に係るパフォーマンステストについて「声に出す」「伝える」「やり取りする」に分類し、授業内容を活用したテストの3年間の計画例を例示するとともに、それを実現するための段階的なスピーキング指導事例等を開発した。

生徒の英語によるパフォーマンスを高めるための 連絡協議会・授業力向上セミナーの実施

東京都教育庁指導部義務教育指導課 統括指導主事 早川 裕之

義務教育指導課では、小・中学校外国語について、研修の実施や指導資料の作成・配布などの情報発信等、学習指導要領に基づく授業改善に向けた様々な取組を行っている。

本年度は、全国学力・学習状況調査において中学校英語を実施する年となっていたことから、各地区の外国語研究会等の代表の先生方・区市町村教育委員会の担当指導主事等を対象に、同調査の結果を基に今後の授業改善について考える機会として生徒の英語によるパフォーマンスを高めるための連絡協議会を実施した。また、昨年度に引き続き12月に実施した生徒の英語によるパフォーマンスを高めるための授業力向上セミナーでは、学習指導要領で求められる言語活動を主軸とした指導について、授業実践映像の視聴とその説明などにより工夫点などを学ぶとともに、受講者同士の協議等を通じて学びを深めていくことができるよう、実践的な内容で構成した。本稿では、10月の連絡協議会で紹介した調査結果の概要や授業改善の視点、12月の授業力向上セミナーの概要についてお伝えしたい。

【連絡協議会（10月）で示した調査結果の概要や授業改善の視点】

1 全国学力・学習状況調査 調査結果の概要（中学校英語）

○ 聞くこと、読むこと、書くこと（3領域の合計問題数17問）について

- ・ 東京都の平均正答率は52.0%（全国46.1%）であり、都道府県別で第1位
- ・ 東京都の領域別の平均正答率は、聞くこと64.7%（全国58.9%）、読むこと57.2%（全国51.7%）、書くこと29.6%（全国24.1%）であり、全国と同様の傾向として、書くことの領域に関しては正答率が低くなっている。

※ 話すこと[やり取り]、話すこと[発表]（2領域の合計問題数5問）については、国が指定した学校の結果からの推定値のみで、都道府県別の結果は公表されていない。

令和5年度

全国学力・学習状況調査
報告書・調査結果資料



令和5年度 全国学力・学習状況調査

【都道府県別】および【指定都市別】
調査結果資料 東京都結果



2 全国学力・学習状況調査（中学校英語）の結果を踏まえた授業改善の視点

① コミュニケーションの目的や場面、状況などを設定すること

- ・ コミュニケーションは、場所や伝える相手などによって伝える内容や表現方法を工夫して行うものであり、この工夫は、「実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合う」言語活動を充実させる上で根幹となるものである。
- ・ 生徒が、既習事項を活用しながら場面や相手に応じて思考・判断し、英語で表現できるよう、目的や場面、状況などを設定した活動を行うようにする。

② 概要や要点を捉えさせること

- ・ 接続詞等に着目させ文と文の関係を正確に読み取ったり、文章全体の大まかな内容や文章全体を通して書き手が最も伝えたいことを捉えたりできるようにする。

③ 自分の考えを話したり書いたりする際、その理由を表現させること

- ・ 対話的な学びを通じて生徒が自分の考えを広げたり深めたりできる場面をつくる。
- ・ 「聞いて話す、読んで書く」などの複数の領域を統合した言語活動を行う中で、自分の考えとその理由を表現できるようにする。

④ 正確に表現させること

- ・ 語句や表現、文構造などについて、目的や場面、状況などが設定された意味のある文脈の中で繰り返し活用させながら定着を図る。「書くこと」においては音声言語以上に正確さが重視されており、少しずつ正確さを高めていく視点が重要である。

【授業力向上セミナー（12月）の概要】

1 東京都教育委員会挨拶 指導部主任指導主事 窪田 香

- 東京都における生徒の英語力～英語科の先生方による取組の成果～

- ・ 国の第4期教育振興基本計画では、中学校卒業段階でCEFR A1レベル相当（英検3級程度）以上の生徒の割合を「5年後目標値：6割以上」としている。東京都におけるこの生徒の割合は、令和4年度英語教育実施状況調査では59.5%であり、既に5年後目標値に届きそうなところまできている。

2 本日の協議に向けて 指導部義務教育指導課指導主事 鈴木 悠平

連絡協議会で示した授業改善の視点のうち、本セミナーに関連の2点を説明した。

- 場面を設定することについて

- ・ コミュニケーションの目的や場面、状況なども含めた場面の設定を明確にした上で単元の目標を設定し、単元の目標の達成に向けて、各時間の目標を設定する。

- 正確さを高めることについて

- ・ 生徒との英語によるやり取りの中でのリキャストや中間指導などを通して、生徒自身が英語表現の誤りに気づき、修正を加えながら正確さを高められるようにする。

3 授業公開（授業者による解説、10月に実施した第1学年の授業映像の視聴から）

国分寺市立第五中学校 指導教諭 前川 卓哉 先生

- 書くことの段階的な指導について

- ㊦ 本単元（第1学年2学期）では、目的・場面・状況を踏まえて目標を設定することで、生徒が単元末の自分たちの姿をイメージしやすいようにしている。

【単元目標】アメリカで暮らす友人に日本の学校生活についてメールで伝えるために、より興味をもってもらえるように異なる点を取り上げた写真について、まとまりのある文章を書くことができる。

- ㊦ 各時間の言語活動の中で、First Writing、Second Writing、Third Writingという順を追って、段階的に一つのトピックについて書かせるようにしている。

- ・ First Writing：各自が自力で書く（この段階では間違いがあってもかまわない。）。
- ・ Second Writing：ペアで確認したり、他者の文章を見たりする活動を通じて英文に情報を追加したりする。➡内容面の気づきを促す。
- ・ Third Writing：AIの添削機能を使い英文を修正する。➡文法面の気づきを促す。

- ㊦ 生徒が書いた英文は、次時に「全体に共通するエラー」や「よい着眼点のあるもの」を取り上げ、全体で共有することで、内容面・文法面のフィードバックとする。

- 単元を通じた指導の工夫について

- ㊦ 単元の目標の達成に向け、各時間で異なる写真を描写する活動を段階的に設定することで、徐々に難易度を上げながら単元の最終目標に近付けていく構成とした。

【構成例】①モデル文を参考に書く→②描写する英文を1文追加する→③自分の考えを追加する→④興味を引く内容を追加するとともに、メール形式の英文にする→⑤友人と共有し内容をブラッシュアップする。

4 協議

言語活動を行う場面設定の工夫、正確さを高めるために行っている指導の工夫について、参加者が自分の指導を振り返り、共有と相互のアドバイスを実施した。

5 協議のまとめ(指導教諭等による実践事例紹介)

渋谷区立松濤中学校 主幹教諭 橋本 晋作 先生

㊦ 「授業は英語で行うことを基本とする」ためには、教師の英語をsimple、slow、clearにすること、教師の英語による指示や説明を生徒が理解できたか簡潔な質問で確認するなど、日本語を介さない指示や説明の工夫を行うことが大切である。

小平市立上水中学校 主任教諭 坪田 祐希 先生

㊦ Teacher Talkを生徒にとって豊富な「理解可能なインプット」にすること、Teacher Talkでは、既習の語彙や表現を使った生徒が理解可能な英語をたくさん話すこと、そしてそれを生徒の発話につなげていくことが大切である。

中野区立中野東中学校 指導教諭 井上 智絵 先生

㊦ 単元末の言語活動(パフォーマンス課題)は、目的・場面・状況を具体的に設定して実施している。例えば、「アメリカに住む友達の本に、彼からの質問に答えるために、自分の考えやその理由を、メールで述べることができる。」などである。

板橋区立板橋第二中学校 主幹教諭 河野 光志 先生

㊦ まず各自で英文を書かせ、その後修正をさせていく場合の指導として、①各自で書いた英文の共有、②共通する誤りの共有(教師はよく起こるエラーを事前に想定)、③内容面の指導(理由や具体例の記載方法など一定の型も例示)を実践している。

福生市立福生第一中学校 指導教諭 寺沢 陽子 先生

㊦ 教科書は、単元末の言語活動「単元の終わりに生徒に何をさせるのか」、つまりその単元を通してどんな力を生徒に身に付けさせるのかを踏まえ、扱い方に変化をもたせるとよい。

6 指導・講評 文部科学省初等中等教育局外国語教育推進室 入之内 昌徳 教科調査官

○ 令和5年度 全国学力・学習状況調査から見える主な成果と課題

- ・ 平成31年度に行った調査結果と比較すると、全国的には「話す(やり取り)」、「統合的な言語活動」の項目で言語活動の実施割合が11%程度向上するなど、授業改善の取組に大きく進歩が見られている。
- ・ 一方で、五つの領域全てに関して、言語活動を行ったという肯定的な受け止めの割合が、学校回答と生徒回答との間では最小で8.2%、最大で15.8%隔たっている。生徒が言語活動に取り組む必然性を十分に意識できていない可能性があるため、言語活動の目的や場面、状況等を明確に設定する必要がある。

○ 授業改善に向けた振り返りの視点

- ① コミュニケーションを行う目的や場面、状況などを明確に設定して言語活動を行っていますか。
- ② 日常的な話題や、社会的な話題を取り上げる等、題材の工夫をしていますか。
- ③ 即興で伝え合うやり取りを授業で行っていますか。
- ④ 聞いたり読んだりしたことについて、話したり書いたりするなどの領域を統合した言語活動を行っていますか。
- ⑤ 言語材料を言語活動と効果的に関連付けて適切に指導していますか。

7 まとめ 武蔵野市立第五中学校 校長 刀根 武史 先生

「書くこと」における授業改善においては、「場面の設定」とゴールとする姿に向けた「小ゴールの設定」を意識することが大切である。また、「正確さを高める」ための指導のポイントは「意味のある文脈の中での繰り返しの活用」と「リキャスト」の二つである。こうしたことを踏まえ、授業改善に努めていただきたい。

東京都教職員研修センターにおける 外国語（英語）に関する研修について

東京都教職員研修センター研修部専門教育向上課 指導主事 杉山 博亮

東京都教職員研修センターでは、都内の公立中学校（義務教育学校、中等教育学校を含む）等の英語科の先生方を対象に、指導力向上と英語力向上の二本立てで、英語の専門性向上研修を実施しております。

令和5年度に実施した研修を以下のとおり紹介します。

1 指導力向上を目指した研修

（1）英語【Ⅰ】（デジタル教科書の活用）

「小学校外国語科・中学校英語科の授業づくり

ーデジタル教科書を使った英語科の指導ー」

- ・デジタル教科書を使った英語科授業における指導の在り方について学び、デジタル教科書の活用方法に関する理解を深める研修

〔日程〕9月26日（火）

〔場所〕東京都教職員研修センター

（2）英語【Ⅰ・Ⅱ】（一人1台の学習者用端末の活用）

「一人1台の学習者用端末を活用した外国語科の指導法」

- ・コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を適切に活用した学習活動に関する具体的な指導法の工夫について学び、特に、授業中にデジタル機器を活用して効果的に指導する能力を高める研修

〔日程〕8月29日（火）

〔場所〕東京都立多摩図書館

（3）英語【Ⅲ】（グローバル化に対応した実用的な英語）

「中学校・高等学校外国語科の授業づくり

ーグローバル化に対応した実用的な英語力を身に付けさせる指導の工夫ー」

- ・生徒の4技能を養い、コミュニケーションを図る資質・能力を育成する指導の工夫について学び、自身の授業改善を図るとともに学校・地域に普及・還元する力を身に付ける研修

〔日程〕9月14日（木）

〔場所〕東京都教職員研修センター（ライブ配信を実施）

〔講師〕一般財団法人実用英語推進機構 代表理事 安河内 哲也

2 英語力向上を目指した研修

（1）英語ONE DAY（Advanced）

「ONE DAY 英会話を楽しむための講座【Advanced】A・B・C」

- ・ネイティブ講師とのオールイングリッシュによるコミュニケーションを通して英語

に対する自信を高めるとともに、指導に役立つ発展的な英語表現を習得する研修

A：－ティーチャートークの技術を高めよう－

B：－ALTとのチームティーチングや打合せに役立つ表現を学ぼう－

C：－英語によるフリートークを楽しもう－

〔日程〕10月23日（月）・10月24日（火）・10月26日（木）

〔場所〕オンラインによる研修

（2）英語コミュニケーション（日本の伝統・文化紹介）

「日本の伝統・文化を英語で紹介しよう」

・都内の名所を英語で紹介する等の実地研修を通して、自身の英語力を高める研修

〔日程〕第1回：10月16日（月） 第2回：10月27日（金）

〔場所〕第1回：東京都教職員研修センター 第2回：浅草周辺

（3）英語力UP講座

「英語力UP講座－問題演習や講師との模擬面接を通して－」

・講師との問題演習や模擬面接を通して、英語検定（準2級～1級）の取得等に必要
な英語力を身に付ける研修

〔日程〕

準2級 【集合研修】 10月30日（月）・11月14日（火）・11月30日（木）

準2級 【オンライン】 11月7日（火）・11月27日（月）・12月7日（木）

2級 【集合研修】 10月31日（火）・11月16日（木）・12月1日（金）

2級 【オンライン】 11月9日（木）・11月24日（金）・12月11日（月）

準1級 【集合研修】 11月1日（水）・11月17日（金）・12月4日（月）

準1級 【オンライン】 11月10日（金）・11月20日（月）・12月5日（火）

2級 【集合研修】 11月2日（木）・11月13日（月）・11月28日（火）

2級 【オンライン】 11月6日（月）・11月21日（火）・12月8日（金）

〔場所〕東京都教職員研修センター又はオンラインによる研修

「英語ONE DAY」、「英語コミュニケーション」、「英語力UP講座」は、英語研修の実績のある委託会社と業務委託契約を締結し、委託会社の専門的なノウハウを活用して実施しています。

3 令和6年度の専門性向上研修について

令和6年度も指導力向上と英語力向上の二本立てで、英語の専門性向上研修を実施する予定です。詳細は、令和6年4月以降、東京都教職員研修センターのウェブページに掲載される「個別の研修概要」や「マイ・キャリア・ノート」等で御確認ください。

Banana Taro誕生！九段中等18回生の歩み！

九段中等教育学校 主任教諭 阿部 公一

春休み明け、３人の生徒が書いてきた英語劇の台本を見てすぐに「今年はこれでいこう！」と思った。『桃太郎』をベースとした物語であり、主人公の太郎をはじめとするユーモアたっぷりの登場人物設定と、中学生ならではのセリフの面白さに思わず笑ってしまった。この劇を初めて見てもきっと楽しんでもらえると思った。台本は春休み中に生徒が自主的に書き上げてきたものである。私は今年度から３年生の担任となり、生徒のことは全くわからない中でスタートだった。そのため、普段の授業で行っているスキット活動では、自分たちの個性を出して見ている人たちも楽しめるようにすることを意識して伝えてきたつもりである。７月に役者のオーディションを行ったが、人数が集まらず、残りの役者は教員自らスキットが上手で声の大きい生徒に声をかけた。

夏休みから練習を始めたが、なかなか全員が揃って練習することはできず、シーンごとの練習となることが多かった。この頃から生徒の代表一人を決めて、監督として生徒たちを仕切ってもらうようにした。11月初めのオーストラリア海外研修旅行と11月終わりの定期考査が終わり、ようやく生徒たちも本格的に練習をしないとまずいという雰囲気になってきた。私も生徒たちの様子を見てきて、この子たちは切羽詰まった状況にならないと本気でやらないだろうと考えていたが、やはりそうであった。「少し長いスキット」と考えれば何とかなるのではとも思っていた。自分たちでアイデアを出し合ったり、家庭科室にあった使わなくなった布などを使ってバナナやその他の小道具を作ったりと準備を進めていった。当初はなかったバナナ銀行は自分たちが話し合って決めて追加した場面である。幸いにも中高一貫校のため、過去に文化祭で使っていたカツラや剣などの小道具があり、新たにものを作る必要はほとんどなかった。本番当日は午前中、学校で一度通して練習する予定だったが、できなかった。会場の練習室でようやく通して練習した時には、20分を超える内容でどうなることかと心配したが、本番は緊張したこともあり少し早くなったため時間内で終えることができた。

今回の英語劇を通して、生徒も私も「普段の授業でのスキット活動の大切さ」や、「自分たちで考えて演じることの楽しさ」を学んだ気がする。九段では１年生の時から教科書の各プログラムの中でペアでスキット活動を行っている。徐々に本文だけではなく自分たちのオリジナルの文を入れさせたり、場面が展開していったりと、オリジナリティが出てくる。他のペアのスキットを見ることで、自分たちももっとできるだろうと切磋琢磨している。３年生になると教科書の本文も長くなってくるが、取り扱っているトピックから調べて、新たな文を入れたりもしている。今回の英語劇でも、立ち位置や誰が舞台のどこから出てきてどこへ行くのかなども監督を中心に基本的に自分たちで決めていった。練習を重ねていく中で、自分たちでアドリブでセリフや動きを入れていくようになったのである。教師があれこれと指示を出すのではなく、生徒たちで考えて、「少し長いスキット」の感覚で作り上げた英語劇であったと振り返る。

逆境を乗り越えた先で得たもの

世田谷区立松沢中学校 教諭 清水さやか

まず初めに、東京都中学校英語学芸大会を運営してくださった関係者の方々に、この場をお借りして御礼申し上げます。

今回出場したファイアンさんは勤勉で、人間性にも優れており、何事にも情熱をもって取り組むことができる模範的な生徒である。加えて、高い英語力と表現力を兼ね備えているため、彼女なら入賞を狙えるかもしれないと私は密かに期待していた。

夏休みが明け、彼女からスピーチの原稿が送られてきた。タイトルは“*It Is What It Is*”。これは、自分の力では変えられない現実や状況を受け入れる際の「仕方ない」という気持ちを表す表現である。普段の彼女からは想像できない言葉だったため、どんなスピーチを書いたのだろうと、かえって私は興味を唆られた。タイトルとスピーチの導入部分に目を通してすぐに、１年前に彼女自身が経験したある出来事について書いたのだと気が付いた。当時、ファイアンさんはバレーボール部でキャプテンを務めていた。技術とリーダーシップがある彼女は、部員や教員から慕われていた。しかし１年前、彼女は試合中に足を骨折し、医師から全治６ヶ月との診断を下されてしまった。大好きなバレーボールを半年もすることができないという現実、彼女にとってあまりにも厳しすぎた。それでも彼女は度重なる手術とリハビリを乗り越え、半年後には再び部活動に参加ができるまでに回復した。

先ほど述べた通り、“*It Is What It Is*”という言葉には「自分の力では何も変えることができない」という意味が込められている。しかし、彼女はスピーチの中で「何も変えられないから諦める」のではなく「何も変えられないからこそ自分の今もっている力を最大限使って最善を尽くす」ことが大切だと、自身の経験を通して気付くことができた。と述べた。どんなに絶望的な状況下にあっても、その中で自分にできる限りのことはやろうとする彼女の粘り強さと前向きさに、私は感銘を受けた。

２学期から本格的な練習が始まった。その際、自分のスピーチをタブレットで録画し振り返ることや、他の英語科教員やALTの前での発表練習を繰り返した。彼女は家庭でも日常的に英語で会話をしているため、発音や表現力は申し分ないが、話す速度が速くなり、重要な部分が聞き取れなくなることがあった。そこで、強調したい部分はあえてゆっくり話すよう伝え、スピーチに緩急をつけることを意識させた。練習を重ねるごとに上達していったことは言うまでもないが、より分かりやすく伝わるように簡潔な表現に変えたり、感情をのせるためにジェスチャーを用いたり等の工夫から、彼女のスピーチに対する情熱を垣間見ることができた。当日、私は所用のために出席が叶わなかったが、大会終了後の記念撮影で撮った写真に映り込む彼女の表情を見て、やり切ったのだと確信した。区・都大会での優勝後、全校生徒の前でスピーチをする機会をいただくことができた。発表前は少し緊張してしまうかもしれないと言っていたが、堂々と発表することができていた。臆することなく自分を表現する彼女を見て、私は感謝の気持ちでいっぱいになった。今回の経験は彼女にとってはもちろん、私にとっても間違いなく大きなものであったと思う。

最後に、今回のスピーチ完成・発表にあたり、本校の英語科教員・ALTをはじめ、多くの方々にお力添えいただいたこと、区・都大会の運営に携わる方々に、このような素晴らしい体験をさせていただいたことに対して、改めて感謝申し上げます。

令和４年度研究発表について

副部長 前田 宏美（東京都立立川国際中等教育学校）

１ 前年度までの研究のあらまし

令和３年度は、学習指導要領の改訂に伴い、新しい中学校検定教科書（６社）と小学校検定教科書（７社）をすべて調査し、使用されている語彙の重なり度を参考に、「研究部中学校推奨語い1800」・「研究部小学校推奨語い700」を選定した。指導する語彙数が圧倒的に増えたなかで、中学校の教師が語彙の指導において、軽重を判断して効率的に指導できることを目指した。

２ 令和４年度の研究

中学校学習指導要領（平成29年公示）の改訂に伴い、学習指導要領解説外国語編では、「『1600～1800語』の全てを生徒が発信できるようにすることが求められているわけではない」（p. 34）とあることから、令和４年度は「研究部中学校推奨語い1800」と「研究部小学校推奨語い700」の発信語彙を調査するに至った。

発信語彙を調査するにあたり、１つめは、中学校・小学校検定教科書において太字で示されている単語を調査し、その重なり度から発信語彙を検討することを試みた。２つめは中学生が書くことにおいて使用する語彙を調査した。

最後に、令和３年度に「研究部中学校推奨語い1800」と「研究部小学校推奨語い700」を発表したが、多くの中学校現場で活用していただくために、２つの語彙リストを活用した指導法を紹介した。それらをリストにした上で、Nation（2001）を参照し、Form（語形）・Meaning（語義）・Use（使用）に分類した。

３ 今後の課題

令和３年度版検定教科書における太字の単語を調査したが、今後は研究部推奨の発信語彙を発表できるよう、さらに調査を進め、リストの補正を行う予定である。

中学生が書く活動で使用した語彙（中間報告）について、概ね傾向を捉えることができたが、今後は「中学生が英語で書きたいけれども書けなかった日本語」について発表し、書く活動の参考にしていきたいと計画している。

「研究部中学校推奨語い1800」「研究部小学校推奨語い700」に基づく実践例では、Use「使用」の実践がなく、これは中学校現場における指導においても同様の傾向であると考えられる。今後は、Use「使用」の実践例を開発し、より充実した語彙学習を生徒に提供したい。

４ 参考文献

Nation, I. S. P. (2001) . Learning Vocabulary in Another Language. Cambridge University Press.

東京教師道場での取組 令和２年度中学校１班の場合

八丈町立富士中学校 教諭 辻 賢哲

１ コロナ禍でのスタート

私が教師道場に応募し、選考結果をいただいたのは、現任校ではなく、八丈島から約70km離れた青ヶ島に勤務していた頃であった。中学校での学習指導要領全面实施を翌年に控え、学習指導要領そのものの理解や学習指導要領に沿った指導法に不安を覚える中、教師道場での学びに寄せる期待は大きかった。

新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい始め、青ヶ島島内では島外への行動が制限され、徐々に島外への出張や研修の機会が減っていった。メールを通して教授やリーダー、他の部員とのやり取りは既に始まっていたが、次年度からの道場はどうなってしまふのだろう、という心配は絶えなかった。ついにその心配は現実のものとなり、令和２年度の教師道場は中止、という連絡を受けた。

私たちの班は、教授やリーダーのご配慮で、メールマガジン形式での研修が始まった。道場での研修を経験された先輩方にも協力いただき、先輩方が作成した指導案を特別に共有いただき、気付いたことや感じたこと等を部員が他の部員とやり取りした。道場では、授業研究（授業を参観し協議する）前に授業者が作成した指導案に対し、良い点や改善点についてコメントを付け、指導案を練り直す。道場での本来の研修の前に、知識を身に付けることは言うまでもなく、部員間の批評が質の高いものになるための、貴重な研修の機会であった。

２ 令和２年度中学校１班の取組

私たち令和２年度中学校１班は、「目標・指導・評価の一体化を基にした思考力・判断力・表現力等の育成及び主体的・対話的で深い学びを進める授業の実現」というテーマに基づき授業を計画し実施していった。４技能５領域のうち、集中的に扱う１つの領域を単元ごとに決め、その言語領域の力が身に付くように目標を設定し、単元の指導計画を立てた。私の実践例を１つ挙げると、とあるLessonでは「書くこと」の領域を扱うこととし、単元目標を「外国人観光客にお土産を紹介するカードを作るために、その特徴やおすすめの原因をまとめよく書くことができる。」と定めた。単元末に設定する、単元目標に沿った言語活動で生徒が十分に力を発揮できるよう、「書くこと」を意識して毎時間の指導計画を立てた。

授業の冒頭で、必ず単元目標を確認すると共に、黒板に板書または掲示して常に単元目標を確認できるようにした。その上で、本時の目標を同様に生徒に提示した。こうすることで、生徒は、「最終ゴールの目標を達成するために今日は〇〇に取り組めばよいのだな」、「この授業、またはこの単元を通して〇〇の力が身に付くのだな」と理解し、明確な目的意識をもって学習を進めることができる。一方で教師は、「この単元末を迎える頃には、生徒はこんな力を身に付けてほしい」、「そのためには、今日の授業で〇〇ができるように指導を組み立てよう」と、具体的な指導観をもって授業に臨むことができる。生徒も教師も互いに「今何のために学んでいるか」が同様に理解でき、毎時間の学びがすべて単元末の言語活動に結びついていることを認識できることが、生徒の学びにとっても、教師の指導にとっても効果的なのではないか、という私たちの仮説と２年間にわたる実証であった。

3 道場での取組の成果

2年間の道場＋1年間の特別研修、計3年間の取組の成果を3点挙げていきたい。

まず、私たち令和2年度中学校1班の仮説に基づく実証の成果の1つとして、何のために授業に取り組んでいるのか、授業を通してどんな力が身に付くのかについて生徒と教師が共通認識をもつことで、生徒が主体的に学習に取り組み、学びを深めていった姿が見られるようになったことが挙げられる。生徒は、単元末の言語活動に向けて常に授業に臨むようになり、例えば「書くこと」を目標にした単元では、教科書本文を扱う際にも、「この文は単元末のライティングで使えそうだ」という意識が芽生えるようになった。実際の生徒の振り返りにも「文を自分のものにいった文に変えることができた」や「教科書や例文を参考にしてやると文が作りやすかった」等の記述が見られ、毎時間の授業を生かして考えを深め、表現しようとする生徒が増えていった。中学校2年生の、英語が得意ではない生徒が「おそらく初めて1文を書けた」と振り返りに書いたのを読み、喜びを感じたことを覚えている。

2点目に、目標と指導が一体化することで、生徒の言語活動に対する評価をブレずに行うことができるようになった。特に、記録に残さない形成的評価においては、場当たりの指導ではなく、常に単元末の言語活動を意識した指導になり、個々の生徒に応じたスモールステップを踏む指導が可能となった。1つの単元内には、4技能それぞれの活動が含まれる。各技能に応じた指導の中に、その単元で扱う1つの技能の要素を必ず含めることで、生徒が授業内での指導を次の授業や単元末の言語活動につなげて生かすことができる。

3点目は、単元目標をよりオーセンティックなものにするよう考えられるようになったことである。指導案を作成した後、部員の先生方や、リーダー、教授より、「この目標で生徒は単元末の自分の姿を想像できるのか」や「この目標の場面は実際の生活で起こりうるのか」といった視点でコメントをいただいた。ある単元で、「英語学芸大会に応募するために（中略）口頭で発表することができる」という目標を設定した。指導案検討では、「本当に全員が応募するのか」、「英語が苦手な人も、先生が想定する2分近くの内容を暗記してスピーチするのか」、「その学年でそこまで全員に要求する段階なのか」等の貴重なご意見をいただき目覚める思いだったことを覚えている。最終的に、扱う言語の領域まで変更して授業を実施することになったが、コメントを基に修正を重ねたことで、生徒が授業内容を自分ごととして捉え、自ら進んで学習できるようになった。生徒一人一人の姿を思い浮かべ、生徒の言語の使用場面を現実的に即して目標を考え設定することが、生徒の主体的・対話的で深い学びにどれだけ影響するのか、身に染みて実感その大切さを学んだ。

4 道場を終えて

教師道場で学ぶ機会をいただいた2年＋1年間は、それまで以前にも、現在を含むそれ以降にもないほど、英語の指導に全力で向き合っていた。研修でわからないことや腑に落ちないこと、あるいは、まったくアイデアが思い浮かばない時など、部員の先生たちがいつも親身になって悩み、考え、支えてくれた。リーダーや教授からは、私たちの成長を信じ、厳しく愛のある指導をいただいた。令和2年度中学校1班の皆さんのおかげで成長させていただき、感謝の気持ちでいっぱいである。

現在は、同僚の教員の理解も得ながら、学校全体で、各単元で領域を1つに絞った指導を継続して行っている。令和2年度中学校1班の皆さんや支えてくださった周囲の先生方のためにも、道場での学びを生かしながら現任校で指導に当たると共に、自分自身を磨き続け、言語活動を通じた生徒の資質・能力の育成に寄与し続けていきたい。

「見方・考え方」を働かせた「読むこと」の言語活動の充実

墨田区立吾嬬立花中学校 校長 佐藤 順一
町田市立鶴川第二中学校 主任教諭 渡邊 良亮

1 主題設定の理由

本研究会プロジェクトチーム部ではこれまで音読指導の効果について研究してきた。音読とは書かれた単語や文、文章などの「書き言葉」を音声言語すなわち「話し言葉」に置き換えて発音するタスクである。一斉に生徒が発音をすることで教室に一体感が生まれ、一見英語を学んでいる雰囲気を作り出すことはできる。しかし、生徒が教師やネイティブのあとについて上手に発音していても、意味も考えず声を発しているだけでは効果は期待できない。そこで我々は英語学習における音読の意義と理論的根拠から考察することにした。まず、リーディングのプロセスをできるだけシンプルにモデル化すると下の図のようになる。

黙読 = 符号化（ディコーディング）
+ 理解（コンプリヘンション）

左記の図はまさしく、言葉を聞いて理解するリスニングが大きく2つの段階に分かれるのと同様である。

- (1) 知覚 - 耳から聞こえてきた音声を心の中の言語処理システムにインプットし、どんな発音が含まれるかを頭の中に表示させる。
- (2) 理解 - インプット音声の意味内容を把握するために、語いや文法、意味内容、前後文脈、関連する背景情報（スキーマ）など各種言語情報を駆使して総合的に理解する2段階がある。

2 研究の概要

本部会では音読指導の重要性について、文教大学の阿野幸一先生のご指導により研究を重ねてきた。音読指導では、具体的な目的をもち下記の手順で指導している。

(1) 語句の音変化をつかませたい場合（聞こえたように発音させたい）

- 1. Repeating テキストを見せずチャンク単位で音読させる。→テキストを見てチャンク単位で練習させる。
- 2. Overlapping / Shadowing

(2) 英文を正確に発音させて読ませたい場合

- 1. Buzz reading 時間を指定して各自が練習し、教科書のQRコードやデジタル教科書を活用して、繰り返し聞き、録音で確認させる場合もある。
- 2. Pair reading 相手がテキストでチェック、一カ所だけ意図的に間違え、気付かせる。

(3) 英文を頭に残させたい場合

- 1. Repeating リピートの際に顔を上げて練習させる。
- 2. Read and look up and pause and sayスラッシュを入れ、暗唱用にポーズを入れる。
※ハンドアウトA
- 3. Back-up repeating 長い文での後半で声が小さくなることを防ぐ。後半に大切な情報が多。

(4) 教科書の内容を理解させたい場合

- 1. Repeating テキストを見てチャンク単位
- 2. Buzz reading 時間を指定して一斉練習（各自のペースで意味を考えながら）

3. 穴あき音読 キーワードをブランクにして、答えを確認しながら内容を確認する。
※ハンドアウトB
4. Pair reading ペアの相手がテキストを閉じリスニング、読み手がポーズの切り方を間違える。

(5) 語いを定着させたい場合

1. 穴あき音読

①日本語を示す方法 ※ハンドアウトC①

②最初にアルファベットを示す方法 ※ハンドアウトC②

ハンドアウトA

Many people think /
curry came to Japan directly from India. /
But do you know /
that it really came from the U.K.? /
In the 18th century, /
special curry spices /
came to the U.K. from India, /
and curry became popular. /

ハンドアウトB

Many people think () came to Japan
directly from (). But do you know that it
really came from the ()?
In the 18th century, special curry () came
to the U.K. from India, and curry became ().

ハンドアウトC①

()の日本語を適当な英語にして音読しましょう

Many people (考えている) curry came to Japan
directly from India. But do you know that it (本当
に) came from the U.K.?

In the 18th (世紀), special curry spices came to the
U.K. from India, and curry became popular. Later,

ハンドアウトC②

()に示されたアルファベットで始まる単語を入れて
音読しましょう

Many people (t) curry came to Japan
directly from India. But do you know that it tr ()
came from the U.K.?

In the 18th (c), special curry spices came to
the U.K. from India, and curry became popular.

※参考資料：ハンドアウトA、B、C①、C②の一部

3 研究実践

指導している1年生を対象とし、学習到達目標を『200～300語程度の英文を読みかえりせず、英文の概要や要点を理解できる』と設定し、主な手立ては以下の2つとした。

(1) 英文を理解するための基盤づくりとして音読を行う。

(2) 初見の英文を適宜取り入れ、概要を理解させる。

<手立て1> 教科書の英文を理解させていくなかで、フォニックスを用いた発音指導や、文構造を踏まえた音読指導を行い、内容理解の基盤づくりを行う。音読指導では、数種類行い、生徒に音読を飽きさせることなく、主体的に英文の意味を音から理解させる実践として取り入れた。(2研究の概要参照)

<手立て2> 本文の概要や要点等については初見で読ませ、内容を把握させる。できるだけ日本語での説明は避け、絵や画像、動画などを活用するなど十分なスキーマを形成してから取り組ませる。初見の英文や表現に対してこれまでの知識を活用し、内容を推測できるように工夫した。その後、ペアで発音や英文の意味を確認させ、音声聞かせてから語いや文法についての指導、そして音読指導という流れで授業づくりをしている

4 研究の成果と今後の課題

(1) 成果

＜手立て1＞ 生徒がノートにて教科書の英文を理解する際に、日本語訳を書かず、単語の発音や音のつながりや脱落、話し手の強調している単語や英文の強弱、抑揚といった、読む際に注意すべき点をデジタル教科書にて何度も聞いて確認し、自ら気づいたことをノートに書き記している。また新出の文法事項に関する指導に加え、英文の要点や概要をつかませ、話し手にとって一番伝えたいことなのかを考えさせている。

＜手立て2＞ 初見の単語に対して、発音から意味を推測し、内容理解の補助的役割として活用できるようになった。また既知の単語の発音と関連させて意味を推測し、文脈から英文の概要を理解できるようになった等、生徒からのふりかえりカードにおける感想から変容を確認できた。

～生徒のふりかえりカードのコメントより～

- ・theの発音の違いに注意して、発音練習をしたい。
- ・何回も読んで、強く発音する所を意識して言えた。
- ・音声を聞いて、つなげるところ、アクセントの部分をノートに書きとることができた。
- ・初めての英文だったけど、発音がスペルを見て、すぐにわかってよかった。
- ・もっとスラスラ読めるように家で読んできたい。
- ・shadowingが一番難しかったので、家で練習してくる。なめらかに発音できるようになりたい。

(2) 課題 上記の2点を主として実践をしてきたが、今後の課題としては以下の2点が挙げられる。

＜手立て1＞ 生徒が一つひとつの単語を読むことに集中するあまり、空読み（単語は読めるが、内容の理解をせずに、音読をすることで英文を読んだ気になってしまっている状態）をさせない工夫が必要であると考え。そのために英文を読ませた後、要約やリテリングをさせたり、概要や要点を短時間で端的に相手に伝えたりといった活動を適宜取り入れ、英文の内容を理解しているのか確認する必要があると考え。

＜手立て2＞ 学年が上がるにつれ、英文構造の複雑さにおける、読み返しをしない工夫が必要である。従位接続詞や副詞句、後置修飾等が増えることにより、一文が長くなるため、主語・動詞を見つけることや修飾の関係などがつかめず、何度も読み返してしまうことが危惧される。そのために文法事項を定着させながらも、チャンクを意識した音読指導や、様々な英文に触れる多読指導など、生徒の読解における抵抗感をなくすことが必要であると考え。

5 最後に

授業では様々な言語活動を通して簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりする活動が多く見られるようになってきた。しかしこのような活動が多くなる一方で、語いや文法に関する指導が簡素化され、内容を十分に理解されないまま、様々なタスクに戸惑う生徒の姿が見られる。また、十分な音声指導が行われず「やりとり」や「即興性」を意識した言語活動が行われ、コミュニケーションが図れていないことがある。目的に合わせて適切に音読指導を行うことで「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」における学習効果が期待できる。本研究会では、今後も生徒が習得した知識や経験を生かし、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて自分の考えや気持ちなどを適切に表現する基礎作りとして、様々な音読指導法を研究していきたい。

6 参考文献

「英語リーディングの認知科学」(門田修平)

「音読レシピーアルク先生応援マガジン」(阿野幸一)

※ハンドアウトはR5都中英研プロジェクトチーム部夏季研修会 阿野先生の資料参照

総務部報告

(総務部長 板垣 繁)

1 定期総会

6月13日

於：葛飾区立常盤中学校

4年ぶりとなる対面型定期総会を開催した。

2 地区幹事名簿作成

今年度の各地区幹事名簿を作成した。

昨年度から、各地区への連絡について、資源及び経費削減の観点から、従来の交換便及び郵送による方法を見直し、可能な限りメールによる伝達を行うことを目指し、推進してきた。

58地区中、38地区とメールによる連絡が可能となった。

3 第47回関東甲信地区中学校英語教育研究協議会栃木大会第1回理事研修会

※オンライン

6月27日、4年ぶりとなる対面開催に向け、開催方法や分科会のもち方等について協議した。

その後、東京都の発表者及び助言指導者と連絡を取り、発表に向け準備を進めた。(県外は紙面発表)

4 全英連との連携

7月23日、オンラインにより全英連夏季全国理事会に参加し、運営に関する会議及び情報交換を行った。

9月、12月に「中英ネットワークショップ」の開催案内を、各地区幹事を通して会員に周知した。

5 第62回大都市公立中学校英語教育研究会連絡協議会神戸大会

10月6日、「外国語教育に求められる資質・能力の現状と課題」をテーマに、紙面での情報交換とオンラインによる協議、講演会が行われた。

(本大会については別ページに詳細)

6 第47回関東甲信地区中学校英語教育研究協議会栃木大会第2回理事研修会

※オンライン

10月30日、翌月に控えた本大会の最終確認を行った。

7 第47回関東甲信地区中学校英語教育研究協議会栃木大会

11月10日

(本大会については別ページに詳細)

8 令和5年度東京都教職員研修センター教育課題研究発表会

11月、本発表会の教育実践発表に向けたポスターを制作し、提出した。

(研究発表会は2月7日から3月29日まで)

9 役員会

4月12日(会長・副会長会)

・今年度活動の打ち合わせ

6月1日 一部オンライン

・役員組織等の確認

・年間事業計画の検討

・中英研定期総会に向けて 他

7月6日(総務部・経理部役員会)

10月2日 一部オンライン

・夏季ワークショップ報告

・英語学芸大会の運営について

・各部の事業報告 他

2月26日 一部オンライン

・令和5年度の活動のまとめ

・令和6年度事業計画について 他

事業部報告

(事業部長 横山 達也)

1 サマーワークショップ

開催日：令和5年8月21日（月）

会 場：千代田区立九段中等教育学校

テーマ：「小・中・高等学校で一貫した英語教育を実現しよう！！」

講 師：東京都教育庁グローバル人材育成部

主任指導主事 森田 剛 様

発表者：島村雄次郎（立川・第七小）

畠山芽含（足立・新田小）

竹田佐和子（足立・新田小）

今西 佑（三鷹・第七小）

小川史哲（八王子・別所）

亀田洋斉（都立青山）

黄 俐嘉（千代田・九段中等）

都内外からのオンライン参加を含め、約100名の参加があり、生徒が世界で通用する英語力を身に付けるため、小・中・高等学校間の連携を密にしていこう！という気持ちで帰路についた。

2 第76回 東京都中学校英語学芸大会

(1) オンライン開催（12月2日実施・文京区立茗台中学校）

◇Speakingの部A（参加数4）

1位 Ready to Jump?

港・港南 Tan Supo

2位 What inspires us to like English?

世田谷・瀬田 Watanabe Kotone

3位 Equality for the Future

世田谷・瀬田 Kataoka Runa

◇Speakingの部B（参加数4）

1位 Beyond Borders

杉並・和泉 Yamamoto Rensei

2位 Gender Issues

目黒・大鳥 Kazuki Shuto

3位 Is the earth's air clean?

世田谷・瀬田 Katagiri Sorato

3位 The Wall

目黒・大鳥 Hanae Uramoto

※2名を3位とした。

◇Playの部B（参加数5）

1位 The Key to Open The World

板橋・高島第一

2位 School Play 葛飾・新小岩

Cinderella 小平・花小金井南

※2校を2位とした。

◇Performanceの部（参加数8）

応募のあった作品はすべて優秀作品として表彰。参加校等は都中英研HPに掲載。

(2) 集合開催（12月26日実施・たましんRISURUホール大ホール）

◇Speakingの部（参加数16）

1位 It Is What It Is

世田谷・松沢 Jazlyn Feyen

2位 Taking Action Changes Our Future

荒川・第三 Shion Sato

3位 What Is Freedom?

港・赤坂 Ranko Kanda

特別賞 The Bitter Fact of the Sweet Banana

目黒・第十一 Mutsumi Koh

特別賞 Being Normal

大田・大森第六 Seiren Matsuzawa

◇Playの部（参加数6）

1位 Banana Taro 千代田・九段中等

2位 BUSU 東京学芸大附小金井

3位 The Happy Prince 練馬・石神井西

特別賞 A Lion Standing Against the Wind 都立小石川中等

コロナ禍においても、英語学芸大会は実施方式を工夫して継続してきた。動画発表と舞台発表は、それぞれの良さがあり、本大会への参加方式の幅が広がったことは、英語学習者の動機付けを高める意味でも意義があった。引き続き、オンライン開催及び集合開催の2本立てで運営していく。

3 第38回 授業力アップ研修会

開催日：令和6年2月9日（金）

会 場：町田市立鶴川中学校

テーマ：教科書で英語4技能を伸ばす

授業者：遠藤 貴裕（町田・鶴川）

授業のリフレクションこそが授業改善の肝であることから、本研修会では、事業部による公開授業と研究協議のみとした。協議では、質疑を深めながら、参加者が実践する具体例を共有した。

調査部報告

(調査部長 荒川 高広)

1 コミュニケーションテストについて

コロナ禍での検討を経てようやく現行指導要領版コミュニケーションテストが完成した。本年度はまず調査部員の勤務校で7月に実施した。またその際、実施校への問題用紙、解答用紙、音源などはすべてデータで送付するという方法を試みた。

その後夏休み期間にライティング部分の採点作業を行い、同時にループリックについて修正を重ねた。作問時に検討を重ねている調査部員同士でも、採点の際にはいくども議論を交わすこととなり、あらためてライティングの評価・採点の難しさとループリックの意義を部員一同が学ぶ機会となった。

6年度は広く参加校を募って実施したい。そのために問題や音源などの頒布をどう行うか、調査部以外の先生方にもライティングの採点方法を学んでいただく機会をいかに設けるかなど、検討課題としている。

2 夏季ワークショップ

日時：令和5年8月23日(水)

内容：

【講義】

「『コミュニケーションテスト』のスペックから問題作成へ ～読むこと～」

講師：工藤 洋路 先生

(玉川大学文学部英語教育学科教授)

【ワークショップ】

参加者が作成した1学期の定期考査問題について協議、改善案発表、講師助言

まず工藤先生から、学習指導要領や国立教育政策研究所の資料などを押さえつつ、「読む力」を測る考査問題作成のポイントについて御講義いただいた。例えば既

習テキストとテスト問題とをどう関連づけるか、そしてテキストやタスクにどうやって真正性を与えるかなどについてである。続いて問題作成の実務的な作業として「スペック」作成の重要性を御講義いただいた。

続くワークショップでは、参加者が各校で実施した考査問題のうち「読むこと」の領域で作成したものを持ち寄り、当該問題についてグループごとに協議した。グループ内で共有した問題例のうち1つを選定し、どうしたらより出題者の見取りたい力を測るのに適切な問題(リード文や設問など)になるかをさらに協議した。最後に、各グループが当初の問題と改善後の問題案について発表し、工藤先生より御助言をいただいた。

実際の考査問題を題材にすることで、測りたい力に見合った目的・場面・状況の設定の仕方などを具体的に考えることができた。(参加者54名)

<参加者の振り返りアンケートより>

- 自分が今まで思考・判断・表現の観点について問う問題だと思って作成していた問題が、実は知識・技能の観点の問題であったということは衝撃だった。また、グループでの検討を通し、どの様な視点で考えれば良いのかを掴んで帰ることができた。
- 単元ごとにどのような力をつけたいかを計画をすることで、定期考査問題を作成する指針になるという重要性を理解できた。また、具体例を見ながら、思判表の問題作成のポイントをたくさん学ぶことができた。
- テスト作成について考えることで、指導が変わるのは確実だ。講義を受けて、得た知識をもとに根拠に立ち返りながら、2学期以降の職務につけると思います。
- 実生活に即した自然な設定を考えるのが難しく時間がかかったが、意見を出し合いながら決めていくことが普段はできないため、それができた今日はとても貴重で有意義な時間だった。
- グループで共有し合い、意見を出し合う活動はとても学びが多かった。

研究部報告

(研究部部長 溪内 明)

1 研究主題と研究の概要

研究冊子『語いと英語教育46』

①「研究部推奨語い1800」に基づく語彙指導実践例

「研究部中学校推奨語い1800」(令和3)を活用して、研究部員が実践している語彙指導を月例の部会で報告し、指導法の改善を図った。また、受容語彙・発信語彙の観点で指導法を分類するとともに、Nation (2001) の“What is involved in knowing a word?”を参照しForm・Meaning・Useのどれにあたるかを明確にした。

②生徒が英語で書きたかったけれども書けなかった日本語 前年の研究に引き続き、書くことの活動において「英語で書きたかったけれども書けなかった日本語」をトピック別に紹介した。

2 研究部ワークショップ

本年度は、対面とオンラインで各1回実施し、8名の研究部員が実践発表を行った。

第1回(対面):8月1日

会場:大田区立志茂田中学校(85名参加)

①「生徒が主体的に授業に参加するための工夫～アクティブラーニング～」

島田 拓 (足立区立入谷南中学校)
多田 翔 (江東区立第三砂町中学校)

②「練習量を増やす工夫」

一ノ瀬 麻子 (港区立六本木中学校)

③「思考力・判断力・表現力の育成 ～小中高連携を意識して～」

岡 大佑 (都立小石川中等教育学校)

第2回(オンライン):8月4日(133名参加)

①「即興で話す力を高める授業実践その2 ～中間指導と評価について～」

松野 麻里恵 (港区立三田中学校)

前田 宏美 (都立立川国際中等教育学校)

②「主体的に学習に取り組む態度の評価」

大島 良一 (江戸川区立篠崎第二中学校)

③「中学校での語彙指導を改めて考えてみよう」

高杉 達也 (筑波大学附属中学校)

3 公開授業・研究発表会

2月22日(木)、渋谷区立松濤中学校の体育館で、公開授業と研究発表会を施した。感染拡大の影響で、対面での実施は4年振りであった。

(1) 公開授業

授業者:橋本 晋作 主幹教諭
(渋谷区立松濤中学校)

内容:Unit 11 “This Year’s Memories”
NEW HORIZON English Course 1
(東京書籍)

(2) 研究発表

(研究冊子「語いと英語教育46」)

発表者:高杉 達也(筑波大学附属中学校)
岡 大佑(都立小石川中等教育学校)

①「研究部推奨語い1800」に基づく語彙指導実践例

②生徒が英語で書きたいけれども書けなかった日本語

(3) 指導講評・講演

講師:三浦 幸子 先生
(都留文科大学)

※研究部ウェブサイトがリニューアルされ、URLが変更になった。研究冊子「語いと英語教育46」、および過去の研究冊子がより閲覧しやすくなった。随時、掲載内容を更新する予定である。

URL: <https://sites.google.com/view/tokyo-chueiken-kenkyubu>

プロジェクトチーム部報告

(プロジェクトチーム部長 佐藤 順一)

これまでプロジェクトチーム部では、「指導場面に応じた音読指導の開発」というテーマのもと具体的な音読指導の進め方について研究を行っており、例年2回の研修を実施している。1回目は夏季休業中にPT部員の実践報告をした後、ワークショップの形式で研修を実施している。今年度は対面形式で実施し、参加した先生には様々な音読指導を体感していただいた。2回目はPT部員による研究授業を行っている。今回はフォニックスを踏まえた発音指導から文構造を踏まえた音読指導を行うことで生徒たちが自信をもって話すことに取り組んでいる様子を公開することができた。また、今年度は関東甲信越地区中学校英語教育研究協議会で「読むことの言語活動の充実」について発表を行った。英文の内容を推測しながら内容を理解していくためには適切な音読指導により音韻符号化（ディコーディング）や文法・意味処理が自動化する必要があることについて提案した。来年度も継続して音読研究を進めていく。

夏季研修会（於：墨田区立吾嬬立花中）

日時：令和5年8月23日（水）

内容：PT部による実践報告

ワークショップ「4技能5領域の力を育成するための音読指導の必要性と指導」

講師：文教大学教授 阿野 幸一 先生

研究授業・研修会（於：町田市立鶴川第二中）

日時：令和6年2月15日（木）

内容：授業研究「音読活動の充実と話すこと指導の工夫」

授業者：町田市立鶴川第二中学校

主任教諭 渡邊 良亮 先生

講師：文教大学教授 阿野 幸一 先生

出版部報告

(出版部長 今本 由美子)

出版部では、主に「都中英研だより」と「中英研会報」の作成・発行を担当している。今年度、部会については集合を基本としながら、会場に来ることが難しい部員についてはオンラインを併用して実施した。また編集作業についても、作業内容に合わせ、集合とオンラインを選択して進めた。

部員による授業公開も再開し、6月に梅田指導教諭の授業を参観、協議では活発な意見交換が行われた。

なお、デジタル化推進と昨今の物価上昇等への対応から、今年度、「だより」の紙面での発行を止め、HPへのアップのみとした。各地区への周知方法等について検討していきたい。「会報」については、紙面や発送の工夫等を行いながら、引き続き冊子で発行し、各校にお届けする予定である。

○「都中英研だより」第77号

(令和5年11月17日発行)

会長あいさつ「都中英研の人材育成について」、また、事業部、調査部、研究部、PT部サマーワークショップの報告を掲載した。

○「令和5年度 中英研会報」第82号

(令和6年3月1日発行予定)

都中英研の年間活動や英語教育活動のまとめ、また、日々の授業実践等に役立つ情報の発信として、「英語教師としての充実、個人としての充実はどちらも大切」、「今こそ考えたい『正確さ』の指導」「令和5年度東京都教育委員会の取組」、「東京都教職員研修センターにおける外国語（英語）に関する研修について」、また、英語学芸大会報告、実践研究、各地区の活動状況、中英研事業報告、各部活動報告等を掲載する予定である。

**第61回大都市公立中学校
英語教育研究会連絡協議会
広島大会報告**

(小中連携教育担当 畠山 芽含)

1 開催日時

令和5年10月6日(金)

13:30~16:50

2 開催方法 オンライン

3 研究主題

「外国語教育に求められる資質・能力の
現状と課題」

4 参加該当都市

札幌市／仙台市／さいたま市／千葉市／
東京都／川崎市／横浜市／静岡市／浜松
市／名古屋市／京都市／大阪市／堺市／
神戸市／岡山市／広島市／北九州市／福
岡市／熊本市

5 各都市からの報告

- (1) 研究主題
- (2) 研究計画・活動計画
- (3) 昨年度の成果
- (4) 課題

6 事前アンケート(一部抜粋)

【小中連携方法について】

札幌市

- ①他校種の教科用図書や参考資料を配布
- ②北海道中学校・高校英語教育研究大会
に小学校が加入

仙台市

- ①年に一度の情報交換会
- ②小中で互いの授業参観

さいたま市

- ①指導計画等の情報交換と協議会交流
- ②さいたま市独自の連携したカリキュラ
ムづくり・独自教材の使用

千葉市

- ①参観等による情報交換
- ②目指す児童・生徒像の作成と小中を貫
くCan-Doリストの作成

東京都

- ①東京教師道場での小中相互授業観察
- ②小中教員同士のティームティーチング
- ③都中英研における小中連携のための研
修会開催
- ④都中英研における小中高大連携のため
の研修会開催

川崎市

- ①各中学校区で年1回の情報交換や交流
- ②小中メンバーでの外国語教育研究会議

横浜市

- ①小中一貫教育推進ブロックでの合同授
業研究会実施・協議会・情報交換会
- ②小中外国語研究会の合同研修会実施
- ③教育課程研究協議会外国語部会(教育
委員会主催)を小中合同で実施

静岡市

- ①市内全小中学校が小中一貫教育校

名古屋市

- ①各区教育振興会英語科主任の情報交換
- ②小中合同学習会実施
- ③中学校教員の小学校出前授業

京都市

- ①市教育委員会主催小中合同研修会
- ②指導力向上研修会への相互参加

大阪市

- ①めざす児童生徒像の共有
- ②参観交流会・出前授業・カリキュラム

神戸市

- ①学力向上推進委員会での授業研究
- ②小中合同教育実践研修会

岡山市

- ①小中で互いの授業参観

広島市

- ①小中連携教育研究会英語チーム発足
- ②公開研究授業での授業観察と協議

北九州市

- ①小学校外国語教育研究会との連携

福岡市

- ①夏休みの小中合同研修会
- ②小中で互いの授業参観

**第73回 全国英語教育研究団体
連合会総会**

**第73回 全国英語教育研究大会
愛媛大会**

「愛顔つながる英語教育の実現～グローバルな視点を持ったアクティブ・ラーナーの育成」

全英連 副会長
兼 中学部会長 難波 浩明
(足立区立第四中学校)

1 大会の主題等

令和5年11月24日(金)～25日(土)、愛媛県にて、第73回全英連総会及び全国英語教育研究大会が開催された。「愛顔つながる英語教育の実現～グローバルな視点を持ったアクティブ・ラーナーの育成」を大会テーマに、小学校段階からの高校卒業段階までを見通した学習と指導の系統性に加え、英語の授業における深い学びを実現するための主体性と協働性の在り方を考える。

2 総会・記念講演

- (1) 期日：令和5年11月24日(金)
- (2) 会場：松山市民会館 大ホール
開会の辞、会長挨拶、祝辞、来賓紹介、会務報告、感謝状贈呈、閉会の辞等、滞りなく行われた。
- (3) 記念講演
講 師：金森 強 教授
(文教大学大学院教育学研究科)
テーマ：「令和の日本型教育における英語教育の在り方～期待と課題」

3 授業発表

- (1) 小学校授業説明とビデオ授業 (45分)
授業実演者：井上 仁司 教諭
(松山市立福音小学校)
授業助言者：池野 修 教授
(愛媛大学教育学部)

<内容>

本単元は、Lesson 5 Where is your treasure? 開隆堂「Junior Sunshine 5」を基に、生徒一人一人が理想とする「20年後の福音タウン」にあったらよいと思

う施設や建物の場所やそれらを選んだ理由などについて、簡単な語句や基本的な表現を用いて、その場で質問をしたり、質問に答えたりして、伝え合う活動を行っていた。交流活動では、2回の間指導を行い、児童にフィードバックを行っていた。

- (2) 中学校授業説明とビデオ授業 (50分)
授業実演者：折本 崇 教諭
(砥部市立砥部中学校)
授業助言者：立松 大祐 教授
(愛媛大学教育学部)

<内容>

Let's Read 1 A Mother's Lullaby (NewHorizon English Course 東京書籍)を基に、「A Mother's Lullaby」を読むことを通して、平和のために、自分はどういうことができるかについて、感じたことや考えたことを、グループやクラスで質問したり、考えたりする学習を行った。

- (3) 高等学校授業説明とビデオ授業 (50分)
授業実演者：濱松 久美子 教諭
(愛媛県立松山北高等学校)
授業助言者：金森 強 教授
(文教大学大学院教育学研究科)

<内容>

Lesson7 Be Free from Gender Bias (BLUE MARBLE ENGLISH COMMUNICATION II 数研出版)を基に、台湾の高校生とのオンライン交流を通して、日本と台湾の身近なジェンダーバイアスについて考え、協働ながら議論を行っていた。

4 分科会

- (1) 期 日：11月25日(土)
- (2) 会 場：愛媛大学城北キャンパス
- (3) 分科会数：前半13部会 後半13部会
内 訳：小学校 4部会 小中連携
1部会 中学校 10部会 中
高連携1部会 高校 10部会

5 今年度の研究大会の特徴

協働的な学びとして、Summarizer、Illustrator、Questioner、Connectorの4つに役割を分担して話し合いを行う、リテラチャー・サークルを取り入れた取組が複数の分科会で紹介されていた。

第47回 関東甲信地区中学校 英語教育研究協議会 群馬大会報告

(総務部長 板垣 繁)

今回の大会は分科会テーマごとに栃木県内4カ所に分散しての開催となった。今年から開催県に加え他都県から教育関係者が参加し、分科会ごとに「研究授業の公開」や「栃木県提案」が行われた。また「記念講演」や「当日の研究授業」がオンラインで配信されている。

栃木県及び各都県からの提案は2月に発行される「研究報告書」により発表される。

以下は大会の概要である。

1 主題

他者とつながり、主体的にコミュニケーションを図ろうとする生徒の育成

～「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を働かせる指導を通して～

2 主題設定の理由

新学習指導要領では、外国語科の目標を「簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を育成すること」とし、その資質・能力の育成をする際は、外国語教育の特性に応じて、生徒が物事を捉え、思考する「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を働かせることが重要であると述べられている。また、教師が指導する際は、「言語の役割として、創造的・論理的思考の側面、感性・情緒の側面、他者とのコミュニケーションの側面があることに留意し、特に他者とのコミュニケーションに焦点を当てて指導すること」が求められている。

2019年度の全国学力・学習状況調査結果には次のような分析がある。

- (1) 話されたり書かれたりしている内容を聞き取ったり、読み取ったりすることは、おおむねできていると考えられる。

- (2) 理解した内容を踏まえ、目的・場面・状況に応じて、話し手や書き手の伝えたいことは何かを理解するなど、概要や要点を捉えることに課題がある。
- (3) 基本的な語や文法事項等の知識を活用することに課題があり、与えられたテーマについてまとまりのある文章を書くときにおいても、相手に伝わる英語で表現することができていないと考えられる。
- (4) 話すことについて全体的に課題は多く、特に即興でやり取りすることに課題がある。

☆書くこと、話すことのどちらにおいても、問われていることが分かれば、自分の考えなどをなんとか伝えようとする粘り強さや意欲が見られる。

2021年に栃木県で実施した英語教育実施調査結果から「生徒と教師が授業を通して何ができるようになるかという目標を共有せず、様々な言語活動や学習評価が行われている」という状況が見られた。栃木県教育振興基本計画の理念にある「児童・生徒に多様な他者と協働して創造する力・心の豊かさを身に付ける」から、本大会の研究主題を設定した。

重点項目として、①単元など内容や時間のまとまりを見通した言語活動の設定、②他者を意識した「目的・場面・状況」を踏まえた、情報や考えの伝え合いを重視した言語活動の充実、③生徒の興味や関心を高め、指導の効率化や言語活動の充実へ向けたICT活用、の3つを設定し、研究主題に迫ることにした。

3 記念講演

「学習指導要領の趣旨を踏まえた中学校における外国語科の学習指導の改善・充実～コミュニケーションを図る資質・能力の育成を目指すための教師の指導力向上にむけて～」

文部科学省初等中等教育局 情報教育・外国語教育課 教科調査官 入之内 昌徳 先生

4 各分科会の研究テーマ及び発表者・指導助言者

第一分科会（千葉県 神奈川県 栃木県）

研究テーマ：「見方・考え方」を働かせた「聞くこと」「話すこと（やり取り）」の言語活動の充実

①発表者（栃木）：

鹿沼市立西中学校 教諭 石川 裕子
宇都宮市立若松原中学校
教諭 永田 夏子

指導助言者：

鹿沼市教育委員会学校教育課 学校教育担当副主幹・指導主事 大門千恵子

②発表者（千葉）：

松戸市立栗ヶ沢中学校
教諭 柿葉 敦子
指導助言者（千葉）：
松戸市教育委員会学習指導課
指導主事 伊東 紀彦

③発表者（神奈川）：

三浦市立三崎中学校
教諭 伊藤 修也
指導助言者（神奈川）：
神奈川県教育委員会 子ども教育支援課
指導主事 野口 純久

第二分科会（長野県 埼玉県 栃木県）

研究テーマ：「見方・考え方」を働かせた「聞くこと」「話すこと（発表）」の言語活動の充実

①発表者（栃木）：

鹿沼市立北中学校
教諭 宇賀神 宏泰
宇都宮市立陽西中学校
教諭 岩井 綾子
指導助言者（栃木）：
日光市教育委員会 学校教育課
副主幹兼指導主事 野口 裕美

②発表者（長野）：松川村立松川中学校

教諭 平澤 恵梨香
指導助言者（長野）：
茅野市立玉川小学校
教頭 大槻 織詠

③発表者（埼玉）：

埼玉県熊谷市立玉井中学校
教諭 落合 千裕
指導助言者（埼玉）：
埼玉大学教育学部 教授 及川 賢

第三分科会（東京都 山梨県 栃木県）

研究テーマ：「見方・考え方」を働かせた「読むこと」の言語活動の充実

①発表者（栃木）：

宇都宮市立姿川中学校
教諭 鈴木 惇也
宇都宮市立鬼怒中学校
教諭 栗田 陽平

指導助言者（栃木）：

宇都宮市教育委員会 学校教育課
指導主事 栗田 寛之

②発表者（東京）：

町田市立鶴川第二中学校
主任教諭 渡邊 良亮
指導助言者（東京）：
墨田区立吾嬬立花中学校
校長 佐藤 順一

③発表者（山梨）：

甲府市立南西中学校
教諭 西岡 妙子
指導助言者（山梨）：
都留市立東桂中学校
校長 三枝 幸一

第四分科会（茨城県 群馬県 栃木県）

研究テーマ：「見方・考え方」を働かせた「書くこと」の言語活動の充実

①発表者（栃木）：

鹿沼市立北押原中学校
教諭 柴田 賢一
宇都宮市立国本中学校
教諭 飯田 浩気
指導助言者（栃木）：
上三川町教育委員会 教育総務課
主幹兼指導主事 渡辺 友見子

②発表者（茨城）：

那珂市立第二中学校 教諭 吉原 永
指導助言者（茨城）：茨城県水戸教育事務所 指導主事 長南 隆

③発表者（群馬）：

沼田市立多那小・中学校
教諭 高山 誠
指導助言者（群馬）：
群馬県教育委員会事務局 利根教育事務所
指導主事 福島 美由紀

千 代 田 区

【3校交流高め合い構想】

区の共同研究会にて、指導案検討・意見交換・研究授業・研究協議を実施し、授業実践を共有し合っている。

I. 授業研究会

◇6月7日 研究授業（神田一橋中学校）

授業者：田川 香 主任教諭
武井 あさひ 教諭

内 容：Sunshine English Course 3
Program 3

ICTを用いた生徒個人による学習進捗管理や、発音練習ができるコンテンツを使用した授業実践について協議した。

◇9月23日 研究授業（麹町中学校）

授業者：小中 啓子 主任教諭

内 容：Sunshine English Course 3
Program 4

後置修飾を活用した授業実践を通して、学習内容についての理解を深め、定着させる方法について協議した。

【千代田区立九段中等教育学校】

昨年度に引き続き、年度当初にKUDAN CAN-DOリストの作成を行い、6年間を見通した、目指すべき生徒の英語力を英語科の全教員で定めた。また、学年末にはCAN-DOリストの到達度に関するアンケートを実施し、各学年の英語力を教員間で共有できるようにした。校内研修については、本年度も10回実施し、外部講師を招いた現行の学習指導要領における望ましい指導及び評価についての研修や、教員間の相互研究授業を行い、各教員の指導力向上を図った。本校独自の取組であるEnglish Showerは、様々な国の留学生を招いて自国の紹介や中学生と一緒に楽しく活動ができるゲームを行っている。また、都英語学会Playの部に参加し、優勝という成績を収めた。

（神田一橋中学校主任教諭 田川 香 記）

中 央 区

I. 研究主題

「話すこと（やり取り）の技能向上を意識した指導の工夫と実践」

II. 研究の経過

◇4月12日（水）

教育会一斉部会、組織・研究主題・活動
予定の決定

◇6月21日（水）

BORDER LINK より ALT紹介・
Speaking Test 日程調整

◇9月6日（水）

上智大学 名誉教授 吉田 研作 先生
講演会・研究授業テーマ決め、指導案検討①

◇10月11日（水）

指導案検討②

◇11月8日（水）

銀座中学校 平山 史織 教諭
研究授業 3F進路教室
ドルトン東京学園中等部・高等部 副校長
布村 奈緒子 先生 指導・講評

◇2月7日（水）

研究のまとめ（収録原稿作成）

◇2月9日（金）

研究報告会

（晴海中学校主任教諭 宇内 祐子 記）

港

区

I. 研究主題

「学習評価における課題の研究と、効果的な授業の探求」

II. 研究の経過

◇ 4月19日 研修会

①組織編制

②年間研究計画

◇ 6月7日 研修会

①情報交換

評価・評定を意識したテストについて

②講 演：Using the iPad in English Teaching

講 師：English Language Fellow
Claire Lee 様

◇ 9月6日 研究授業

授業者：兵頭 幸世

授業者：藤谷 麻由美
(高松中学校)

単元名：New Horizon English Course 3
Stage Activity 3
“Let's Have a Mini Debate”

講 師：東海大学文学部英語文化
コミュニケーション学科 教授
綾部 功 先生

◇ 11月8日 港区英語発表会

赤坂区民センター区民ホールにて

◇ 2月17日 研修会

①研究のまとめ

②次年度引継

③研究収録「ひびき」原稿確認

(三田中学校主任教諭 松野 麻里恵 記)

新

宿

区

I. 研究主題

「主体的・対話的で深い学びの実践と授業改善」

①様々な対話活動を通して、「やり取り」
の力を育成する指導

②生徒用タブレット端末を効果的に活用
した指導

II. 研究の経過

◇ 5月10日 春季一斉部会

組織作り、研究テーマと活動計画決定

◇ 8月1日 夏季一斉部会

①第1回研究授業の指導案検討

②英語学芸発表会に向けて

◇ 8月4日 新宿区立中学校英語学芸発表会

◇ 9月12日 第1回研究授業

授 業 者：岡 信太郎 教諭
(牛込第二中学校)

授業内容：New Horizon English Course 3
Unit 4 “Be Prepared and
Work Together”

講 師：東京都立両国高等学校・
附属中学校 主任教諭
壽原 友理子 先生

◇ 10月4日 秋季一斉部会

①第2回研究授業の指導案検討

②英語学芸発表会の反省

◇ 11月2日 第2回研究授業

授 業 者：烏谷 亮 主任教諭
風間 麻美 教諭
(牛込第三中学校)

授業内容：New Horizon English Course 2
Unit 4 “Homestay in the
United States”

講 師：元 東京都立両国高等学校・
附属中学校 杉本 薫 先生

(新宿西戸山中学校主任教諭

深山 朋子 記)

文 京 区

I. 研究主題

「主体的・対話的な深い学びを引き出すための、即興につながるスピーキング指導の在り方～指導と評価の一体化を目指して～」

II. 研究の経過

◇5月6日 区中研一斉部会(会場:文林中)

- ①研究テーマ、活動方針の決定
- ②副部長、会計、都中英研地区幹事の選出
- ③実践報告「オーストラリア パース日本人学校と第八中学校の英語交流授業について」

◇8月8日 夏季ワークショップ自主研修会(会場:文林中)

発表①「本文の内容に関連させた新出文構造の導入」

原田 博子 主任教諭(第十中)

発表②「Writing を通して表現力を高める活動」

田中 久美子 指導教諭(茗台中)

◇10月5日 研究授業(会場:第三中)

研究主題に基づいた授業を参観し、協議会を行った。

授業者:梶田 留美 主任教諭(第三中)
Christopher Barlow (ALT)

単元名:1年生 Unit 5 “This is Our School”

◇全国英語教育研究団体連合会参加

今井 慎二 教諭(第六中)

◇1月17日 一斉教科部会(会場:本郷台中)

①報告:全英連大会・研究授業・夏季自主研修会・World Classroomによる実践・海外派遣研修

②講演・ワークショップ

「新学習指導要領に即した指導と評価」

講師:都留文科大学・東京女子大学

講師 本多 敏幸 先生

III. まとめ

対面での研修会が増え、実践に基づいた指導の工夫を共有し、深い学び合いができた1年だった。来年度も継続していきたい。

(第八中学校教諭 満留 桂子 記)

台 東 区

I. 研究主題

「ICTを活用した思考力・判断力・表現力を育成する指導の工夫と授業の実践」

II. 研究の経過

◇4月12日 区中研一斉部会

組織編制、研究主題の決定、年間活動計画 他

◇5月10日 区中研総会

◇7月7日 区中研一斉部会

講演

「ICTを活用した思考力・判断力・表現力を育成する指導の工夫と授業の実践」

講師:埼玉学園大学准教授

奥住 桂 先生

◇10月4日 区中研一斉授業

授業者:深瀬 智子 主任教諭
(桜橋中学校)

単元名:2年 Lesson 4 Uluru

NEW CROWN English Series 2

講師:埼玉学園大学准教授

奥住 桂 先生

III. 成果と課題

◇成果 ICT機器の活用が教師の授業力向上に結び付くように感じられ、これが生徒の英語に対する学習意欲をより引き出すことにつながった。また、発表ツールや課題への取り組みが容易となり、ゲーム的要素を持ちながら、知的かつ挑戦的な活動を行うことができた。

◇課題 日常的に活用するには、機器トラブルを想定し、Plan Bを常に用意する必要があるため、授業準備に莫大な時間がかかる。ICT機器を活用してどんな教材を作成するか、どんな場面で活用するか、また、生徒間の口頭での活動とのバランスなど、さらに指導方法の追求をする必要がある。

(桜橋中学校副校長 寺内 周平 記)

墨 田 区

I. 研究主題

「即興で話す（やり取り）力の育成と言語活動の工夫」

II. 研究の経過

◇4月19日 区中研一斉部会

- ①組織づくり
- ②研究テーマの決定
- ③年間活動計画の検討
- ④研究授業実践校の決定
- ⑤ESAT-J、海外派遣について

◇6月29日 第1回研究授業

授業者：紺野 さくら 教諭
庭山 航瑠 教諭
高井 美里 教諭
(本所中学校)

単元名：3年 Let's Write 2
記事への意見 一投稿文一

講 師：白百合女子大学教授
山野 有紀 先生

◇8月29日 夏季研修会

講 師：筑波大学附属中学校
栖原 昂 先生

講 演：Speaking指導上の工夫について

◇11月29日 第2回研究授業

授業者：岩淵 恭子 主任教諭
澤 雄策 主任教諭
長谷川 愛莉 教諭
(両国中学校)

単元名：1年 Stage Activity 2
“My Hero”

講 師：情報経営イノベーション専門職
大学講師
奥村 耕一 先生

◇2月7日 区中研発表会

(墨田中学校主任教諭 久保田 航 記)

江 東 区

I. 研究主題

「生徒の主体な態度を育成する指導の工夫と評価」

II. 研究の経過

◇6月7日 区中研一斉部会

内 容 活動計画、組織作り

◇6月21日 教科交流授業研究の日

・深川会場
授業者：高山 久恵 主幹教諭
(東陽中)
講 師：藤木 敢 主幹教諭
(深川第七中)

・城東会場
授業者：市川 周子 教諭
(南砂中)
講 師：多田 翔 主任教諭
(第三砂町中)

◇10月11日 教科交流授業研究の日

・深川会場
授業者：高橋 瑞希 教諭
(深川第八中)
講 師：鈴木 知美 主幹教諭
(深川第五中)

・城東会場
授業者：祖母井 千秋 主任教諭
(大島西中)
講 師：水嶋 諒 主任教諭
(第四砂町中)

◇10月31日 江東区英語学会

会 場：江東区文化センター
内 容：speech、play、others
play優勝校：深川第五中学校
都英語学会大会に出場

◇12月6日 区中研英語部研究授業

授業者：多田 翔 主任教諭
(第三砂町中)
講 師：元両国高等学校附属中学校
杉本 薫 先生

◇2月7日 区中研一斉部会

内 容 一年間のまとめ
(第二砂町中学校教諭 中條 由華 記)

品 川 区

I. 研究主題

「小中連携による英語教育の推進」

II. 研究の経過

◇9年間の英語学習の内容や方法が定着し、教育会英語部でも、小中学校の教員が共に集まり、授業を見合い、話し合うことは当然のことのようになった。また、小学校高学年で教科化された学習内容や、中学校での学習内容が質・量ともに増えてきているなど、今日の英語学習の課題を意識して取り組めた。

◇低・中・高・7年・8年・9年と各分科会で6本の授業を行った。小中学校どちらの教員も目の前の子どもたちの学びに向かう姿を見て、9年間の英語学習について考えるよい機会となった。

◇6月には、各分科会で勉強会を行った。品川区が導入した英語カリキュラムを研究・開発された青山学院大学アレン玉井光江教授を講師として招くことができ、小・中9年間を通して目指す「学びに向かう姿」について、ご講義をいただいた。

III. まとめ／成果と課題／その他 等

研究授業を通して、各自の授業を振り返る機会となった。第8・9学年では、生徒がタブレットを活用する授業とオールイングリッシュで実施した授業構成を見ることができた。小学校のJTEとHRTの授業から児童の学習効果を把握することができ、小中9年間の最終的に目指す第9学年の生徒像を考えることができた。

授業者：品川学園 渡邊 直弥 教諭

授業者：八潮学園 石田 千尋 主任教諭

講師：上智大学名誉教授

吉田 研作 先生

講師：青山学院大学教授

アレン 玉井 光江 先生

講師：品川区教育委員指導課長

中谷 愛 先生

(八潮学園主任教諭 石田 千尋 記)

目 黒 区

I. 研究主題

「3観点での指導と評価の一体化
～より適正な評価を求めて～」

II. 研究の経過

◇4月26日

研究テーマ、組織の決定

◇5月10日

東京都英語スピーキングテストに向けて
の実践・報告

◇7月5日

「思考力・判断力・表現力を伸ばす指導
と評価の工夫」についての情報共有

◇10月11日

「主体的に学習に取り組む態度の指導と
評価の工夫」についての情報共有

◇11月1日

スピーチコンテスト

参加校：区内区立校9校

講師：菅原 喜一 先生

(英理女子学院高等学校)

◇12月6日

授業研究 2年生

授業者：椿 恭子 主幹教諭

齋藤 幸代 教諭

(第一中学校)

◇1月31日

分科会

小学校、中学校での研究報告

◇2月28日

全体会

今年度の研究の発表

(第十中学校主任教諭 山主 信 記)

大 田 区

I. 研究主題

「発達段階に応じたコミュニケーション能力の育成」

II. 研究の経過

- ◇ 4月12日 第1回部会（御園中学校）
部員自己紹介、組織編制、研究主題、年間活動計画、研究授業者、連合学芸会等

- ◇ 7月12日 第1回研究授業
（大森第六中学校）

授業者：菅 一輝 教諭

講 師：元千代田区立九段中等教育学校
教諭 / 元明治学院大学文学部
非常勤講師
田口 徹 先生

- ◇10月4日 小中合同研究部会
会 場：池上小学校

- ◇11月2日 連合学芸会（英語の部）
会 場：大田文化の森 ホール
発 表：スピーチ26名 プレイ1校

- ◇ 1月31日 第2回研究授業
（志茂田中学校）

授業者：小俣 雄治 教諭

講 師：上智大学文学部英文学科
非常勤講師 北原 延晃 先生

- ◇引き続き 第2回部会

今年度の総括及び来年度の予定

◆授業改善リーダー

金子 健次郎 主任教諭（志茂田中学校）

◆BULLETIN-OTA English Today-

「紀要」を年間の研究記録として毎年発行している。今年度は第33号である。

（蓮沼中学校主幹教諭 井原 章行 記）

世 田 谷 区

I. 研究主題

「せたがや探究的な学びの実践」
～「ICTの活用をととして」～

II. 研究の経過

- ◇ 5月10日 世田谷区立中学校教育研究会
役員会（梅丘中学校）

- ◇ 6月7日 前期教育研究会（芦花中学校）
テーマ：「研究主題について」

- ◇ 7月7日 国立私立交流研究授業
（深沢中学校）
授業者：花本 宜宏 主幹教諭

- ◇ 8月1日 夏季研修会（梅丘中学校）
内 容 「せたがや探究的な学びの実践」
～「ICTの活用をととして」～
講 師 谷内 正裕 様

- ◇11月8日 後期教育研究会
第34回世田谷区立中学校 英語スピーチ
コンテスト（中町ふれあいホール）

- ◇ 3学期 研究会（未定）

III. まとめ

研究紀要作成

（芦花中学校主任教諭 関根 貴子 記）

渋谷区

I. 研究主題

「ICTの効果的な活用」

II. 研究の経過

◇4月26日 区中研一斉部会

組織編制、研究主題、研究授業校の決定

◇10月11日 指導案検討会

研究授業者の指導案についての協議

◇11月1日 研究授業

授業者：菅原 和義 主任教諭

会 場：鉢山中学校

単元名：NEW HORIZON

English Course 2

Unit 4 Let's Write 2 ホームステイのお礼状一手紙ー

講 師：東京都教育庁グローバル人材育成部国際教育企画課

統括指導主事 関谷 さやか様

III. まとめ

今年度は生徒の効果的なICT活用について研究を行った。ICTの活用法実践事例を含めた講義を通して、実践的な指導についての知識を深めることができた。

(広尾中学校教諭 小菅 直輝 記)

中野区

I. 研究主題

「主体的・対話的で深い学びを実現する授業の工夫

～「話す」技能を高める授業の実践と教材開発～」

II. 研究の経過

研究主題の検討と決定（4月）

研修会の実施（6月7日）

「e-ポータルQubenaの活用方法と活用例」

講 師：(株) COMPASS

青木 瞳子 様

研究授業の実施、および研修会(10月18日)

授業者：中野区立北中野中学校

鈴木 紗千 教諭

単 元：SUNSHINE ENGLISH COURSE 2
Power-Up 3 レストランで食事をしよう

講 師：大東文化大学外国語学部 准教授
淡路 佳昌 先生

「生徒が安心して話し、仲間が学びを深められる授業」

◆チェックすべき視点と内容

<主体的な学びとは>

<対話的な学びとは>

<「話すこと」指導の難しさについて>

◆工夫・ヒント

・「話す」前の足場づくり

→良質な手本としての教科書本文の活用

・橋渡しの活動（Interactなど）

・学びを深め、広げる工夫

→共通の土台を踏まえた発表活動により、互いに楽しめる内容に。

→仲間のoutputは最良のinputである。

研修会

講 師：中野東中学校

井上 智絵 指導教諭

内 容：定期考査・観点別評価についての注意事項

連合文化発表会の実施（11月3日）

なかのZEROホールにて開催、12名出場

紀要作成（12月）

研究発表会及び講演会の企画・実施（2月）

(緑野中学校主任教諭 亀山 真由美 記)

杉 並 区

I. 研究主題

「学習指導要領における指導と評価の一体化を目指して」

II. 研究の経過

◇ 8月21日 夏季研修会

「話すこと（発表・やり取り）の力を高める」指導法と評価のあり方

講 師：株式会社インタラック関東南 様
第1部

講義及びALTとのグループワーク

(1) Performance Testの指導と評価

(2) 話す力を伸ばすためのTeacher's
Cloudの活用方法

第2部 グループ協議

(1) 話すこと（発表・やり取り）の力を
高める指導法・評価の実践報告等

(2) 資料・教材の共有

会場：済美教育センター

◇ 9月11日 研究授業および研究協議

授業者：荻窪中学校

山崎 美砂子 主幹教諭

単元名：NEW HORIZON English
Course 3 Unit 4 “Be Prepared
and Work Together”

講 師：済美教育センター

菅野 武彦 先生

◇ 10月28日 杉並区英語学会

内 容：Speech, Skit

会 場：勤労福祉会館

(中瀬中学校教諭 田端 真希 記)

豊 島 区

I. 研究主題

「3観点での評価方法の工夫と改善」

II. 研究の経過

◇ 4月12日 区中研一斉部会

・研究主題の決定

・研究授業担当校の決定

◇ 11月8日 区中研英語部会

研究授業

授業者：千川中学校

井上 秀輝 教諭

講 師：渋谷区立松濤中学校

橋本 晋作 主幹教諭

単元名：Here We Go!

English Course 1

Unit 6 Cheer up, Tina

◇ 1月10日 区中研英語部会

(外国語科)

テーマ：ワークショップ

「3観点におけるペーパーテスト
・パフォーマンステスト」

講 師：都留文科大学文学部

英文学科非常勤講師

本多 敏幸 様

III. まとめ

今年度は研究授業だけでなく、講師の先生を招聘して、ワークショップを実施するなど、昨年以上に内容を充実させ、意見の交流の機会を増やすことができた。次年度も英語科の先生の学びが深まるように進めていきたい。

(千登世橋中学校教諭 竹内 彩 記)

北

区

I. 研究主題

「実践的コミュニケーション能力の向上
を目指した授業の工夫」

II. 研究の経過

◇4月19日（水）

区教育研究会一斉部会（王子桜中学校）

- ・組織づくり
- ・今年度の活動計画
- ・校内研究テーマ決め

◇11月2日（木）

北区連合学芸会（北区滝野川会館）

- ・英語スピーチ（各校代表生徒1名出場）
- ・第1回、第2回運営委員会開催
（7月14日、10月17日）

◇11月15日（水）

研究授業（明桜中学校）

授業者：根本 奈菜 教諭

単元名：NEW HORIZON English

Course 1 Unit 7 “Let’s Talk 2”

講 師：北区外国語アドバイザー

重松 靖 先生

◇1月17日（水）

実践ワークショップ（神谷中学校）

演 題：「多様な学習者に寄り添う中学
校英語教育」

講 師：白百合女子大学文学部

英語文学教授

山野 有紀 先生

（浮間中学校教諭 岡田 あゆみ 記）

荒

川

区

I. 研究主題

「積極的にコミュニケーションを図ろう
とする態度の育成」

～世界につながる荒川の英語教育～

II. 研究の経過

◇4月12日 組織づくり、研究主題決定

◇7月12日 講演&ワークショップ

「学校は友だちと楽しく復習をするところ」

講 師：上智大学文学部英文学科非常勤

講師、愛知淑徳大学交流文化学

部非常勤講師

北原 延晃 先生

◇9月13日 研究授業 第一中学校

授業者：石川 直美 教諭

尾賀 弘美 主任教諭

高松 脩生 教諭

単 元：New Crown 3 Lesson 4

My Family, My Hometown

講 評：北原 延晃 先生

◇10月26日 区連合英語発表会

場 所：サンパール荒川

参加校：10校

最優秀生徒：第三中学校

東京都英語学芸大会に出場

◇11月8日 研究授業 諏訪台中学校

授業者：窪田 良行 主任教諭

単 元：New Crown 3 Talk 6

あなたは どう思う？

講 評：北原 延晃 先生

◇1月17日 小中合同部会

研究授業：赤土小学校

授業者：繁村 竜治 主任教諭

単 元：これなあに？

（動物・果物・色・形）

（区小学校Lesson Plan 第3学年

Unit 9）

講 評：聖学院大学人文学部児童学科

特任教授 小川 隆夫 先生

（第四中学校主幹教諭 島田 朋美 記）

板 橋 区

I. 研究主題

「英語授業における効果的な端末の活用」

II. 研究の経過

◇4月19日 区中研一斉部会（板橋一中）

◇4月29日 研究授業（板橋二中）

授業者：藤原 美香 教諭

講 話：「英語授業における効果的な端末の活用」

講 師：都立両国高等学校・附属中学校
主幹教諭 鈴木 悟 先生

◇8月2日 夏季区中研英語部会
（上板橋三中）

講 話：「目標と指導と評価の一体化
～テストづくりどうしていますか～」

講 師：文京区立茗台中学校校長
西貝 裕武 先生

◇11月4日 「英語のつどい」
（板橋区立文化会館）

◇11月8日 区中研一斉研究授業
（志村五中）

講 話：「多様な学習者に寄り添う英語授業づくり～英語授業における効果的な端末の活用～」

講 師：白百合女子大学教授
山野 有紀 先生

◇2月6日 区中研研究発表会
区中研収録原稿執筆校

- ①加賀中学校
- ②志村第五中学校
- ③上板橋第三中学校
- ④高島第一中学校

（西台中学校主幹教諭 金井 大悟 記）

練 馬 区

I. 研究主題

「基礎・基本の定着を図り、主体的・対話的で深い学びの実現を通してコミュニケーションを図る資質・能力を育成する」

II. 研究の経過

◇5月17日 一斉部会

◇6月21日 区中研教科部会 研究授業
ABCDブロックごと

A 豊玉中

授業者：関口 玲 教諭

B 練馬中

授業者：岡崎 慶輔 教諭

C 大泉西中

授業者：池田 弘平 教諭

D 石神井東中

授業者：和田 晴夏 教諭

◇7月25日・7月26日 夏期研修会
《25日》

講 演：「ルワンダ希望の義足」

講 師：ルダシングワ・真実 様
ガテラ・ルワシングワ 様
（開進二中 セミナーハウス）

《26日》

講 演：「デジタル教科書の活用」

講 師：東京家政大学教授
太田 洋 先生

◇9月16日 第59回英語学会
（練馬区立生涯学習センター）

都大会出場校：石神井西中学校

“The Happy Prince”

◇11月8日 区中研 研究発表

大泉学園中学校 伊藤 智子 主任教諭

講評・講演：足立区教育委員会
教科指導専門員
小寺 令子 先生

（石神井西中学校主任教諭

新野 美紀 記）

足 立 区

I. 研究主題

「足立スタンダードに基づく指導と評価の一体化～五領域の各目標を達成するために～」

II. 研究の経過

◇4月14日

一斉部会 組織及び活動計画案提示

◇6月7日 役員会 研修会準備

◇7月12日 ワークショップ

(1)「中学1年生の書くことの指導

～音声から文字への円滑な接続、日々の授業での書くことの指導をどう行うか～」

講 師：教科指導専門員

関口 智 先生

(2)「“Read and Think”どう指導する？

～導入から内容理解、そして自己表現へ～」

講 師：教科指導専門員

石井 亨 先生

◇9月13日

小中合同研修会〈小学校主催〉研究授業

授業者：加平小学校

江原 明日香 教諭

講 師：文部科学省初等中等教育局視学官

直山 木綿子 先生

◇10月11日

小中合同研修会〈中学校主催〉講演会

「小学校で学習したことを豊かな自己表現に繋げる指導～HowだけでなくWhatを豊かにする思考力を育む～」

講 師：玉川大学教授

工藤 洋路 先生

◇10月26日 連合英語学会

Playの部 第1位 第十中 都大会出場

◇1月31日 一斉部会 講演会

「教科書の題材を活かして、思考力・判断力・表現力を育成するために一教科書本文の指導を中心として」

講 師：文教大学教授 阿野 幸一 先生

(第四中学校主任教諭 上尾 栄美子 記)

葛 飾 区

I. 研究主題

「学習指導要領の趣旨に則った適正な評価評価について」

II. 研究の経過

◇5月10日 葛中研英語研究部会

組織・研究テーマ・事業計画案提示

◇7月3日 葛中研英語研究部会研究授業

授業者：中川中学校

佐藤 薫 主任教諭

堤野 紘明 教諭

◇7月31日(月)～8月2日(金) 2泊3日

葛飾区中学生イングリッシュキャンプ

(於：British Hills)

葛飾区内中学校から96名の生徒が参加

◇10月11日 葛中研英語研究部会研究授業

授業者：桜道中学校

新保 あゆみ 主任教諭

竹元 智子 主任教諭

高垣 亮 教諭

◇10月14日 第38回葛飾区立中学校英語

スピーチ&プレイコンテスト(於：高砂

地区センター) ※本年度はプレイ部門1

校、スピーチ部門24名、レシテーション

の部2名が参加

◇1月24日 葛中研冬季大会研究発表

研究主題：「学習指導要領の趣旨に則った適正な評価評価について」

発表者：亀有中学校

岡宗 直美 主任教諭

青戸中学校

三島 直子 主任教諭

◇2月6日 葛中研英語研究部会研究授業

授業者：堀切中学校

上阪 龍範 主任教諭

◇3月 役員会

(金町中学校教諭 高山 翔 記)

江戸川区

I. 研究主題

「Speaking活動等を通して主体的にコミュニケーションを図る資質・能力の育成」

II. 研究の経過

◇6月7日（水） 区中研一斉部会

講演：「改めて評価について考える」

講師：田村 岳充 先生

（宇都宮大学教職大学院助教）

◇2月7日（水） 区中研一斉部会

研修会

- ・「生徒の英語力を高める授業について(仮)」
- ・TGG研修報告
- ・海外派遣研修報告

◇江戸川区学力向上プロジェクト

英語指導力アップ講座

（参加希望者による自主的な研修会）

- ・8月28日（月） 14:00～16:30
「話すこと（やり取り）の指導」
於：小岩第四中学校
- ・8月29日（火） 14:00～16:30
「パフォーマンステストとその評価」
於：小岩第四中学校
- ・11月14日（火） 14:00～16:30
「授業デザインとテスト」
於：小岩第四中学校
- ・2月1日（木） 13:00～16:30
「TGG施設見学」
於：東京グローバルゲートウェイ

（小岩第四中学校長 鈴木 訓文 記）

八 王 子 市

I. 研究主題

「指導と評価の一体化を意識した授業改善」

II. 研究の経過

◇4月12日

英語部教科主任会（第五中学校）

- ・方針、研究テーマの決定
- ・スピーキングテストに向けて確認

◇8月23日

夏季研修会（希望者のみ）

講 師：順天堂大学国際教養学部

教授 佐藤 ひろみ 先生

講 演：「わくわくする英語授業のポイント」

◇11月8日

一斉部会研究授業

- ・第一ブロック（第六中学校）

授業者：横山 達也 教諭

講 師：東京女子大学

講師 本多 敏幸 先生

- ・第二ブロック（第二中学校）

授業者：鈴木 菜々子 教諭

講 師：順天堂大学国際教養学部

教授 佐藤 ひろみ 先生

- ・第三ブロック（梶田中学校）

授業者：川邊 耕太 主任教諭

講 師：明星大学教育学部教育学科

教授 内田 富男 先生

- ・第四ブロック（中山中学校）

授業者：西村 皐月 教諭

講 師：玉川大学文学部英語教育学科

教授 工藤 洋路 先生

（恩方中学校主任教諭 秋守 悟 記）

立 川 市

I. 研究主題

「生徒の発信力を高める指導の工夫

－即興に対応する力を含めて－」

II. 研究の経過

◇5月10日 第1回教科部会

- (1) 英語科の活動テーマについて検討・決定

- (2) 研究授業者・予算について検討

◇8月22日 第2回教科部会

- (1) 講演

「生徒の発信力を高める指導の工夫

－即興に対応する力を含めて－」

- (2) 模範授業

- (3) 研究授業に向けての指導・助言

講 師：文教大学国際学部

教授 阿野 幸一 先生

◇10月4日 第3回研究授業

授業者：立川第八中学校

大川 久美 主任教諭

単元名：New Horizon English Course 1

Unit 5 Japanese Summer

Festival Part1

「どこにあるか・どこにいるかを説明しよう」

- (1) 研究授業

- (2) 研究協議

- (3) 指導・講評、講演

講 師：世田谷区立三宿中学校

指導教諭 山岸 恒一 先生

III. まとめ

東京都中学校英語スピーキングテスト（ESAT-J）、全国学力学習状況調査、英語検定等、話す力が試される機会が増えている。今後、ますます生徒の発信する力が求められていく。必然性のある場面設定すること、繰り返し学びながら定着させていくこと、暗示的なフィードバックをすることなどを意識した授業実践をしていきたい。

（立川第三中学校主幹教諭

入江 裕美子 記）

武 蔵 野 市

I. 研究主題

「新学習指導要領全面实施3年目における小中連携」

II. 研究の経過

◇10月11日 授業研究1 小学校第4学年

単元名：Here We Go！ Unit 6

授業者：井之頭小学校

岡崎 夏希 教諭

講師：世田谷区池之上小学校

指導教諭 村岡 美奈子 先生

◇11月8日 講演・ワークショップ

「新学習指導要領全面实施3年目における小中連携～よりよい外国語の授業づくりに向けて～」

講師：国士舘大学教授

五十嵐 浩子 先生

◇1月17日 授業研究2 中学校第2学年

単元名：Lesson 8

未来をあらわす表現 (will)

授業者：第二中学校

宇都宮 佐和子 主幹教諭

川邊 真梨子 主任教諭

三宅 健司 教諭

講師：重松 靖 先生

III. まとめ

新学習指導要領が全面实施されてから早3年目を迎えた。授業者が様々な工夫をし、確実に学びが深まっている。小中でどのような授業をしているのかを教員間で情報共有をし、学習者がよりよい学びができるように、今後も追求していきたい。

(第一中学校主任教諭 永井 剛 記)

三 鷹 市

I. 研究主題

「発達段階に応じたコミュニケーション能力の育成～ICTを活用した指導方法の工夫～」

II. 研究の経過

◇5月10日 組織決めと年間活動計画

◇6月14日 小・中合同研究授業

単元名：Unit3 How many?

授業者：竹内 悠人 教諭

(第六小学校 第3学年)

◇9月6日 小・中合同研究授業

単元名：Unit4 Tour in New York City

授業者：田中 佳奈 主任教諭

(第一中学校 第2学年)

◇10月4日 講演会

講師：文部科学省視学官

直山 木綿子 先生

演 題：「言語活動を通して指導することの具体」

◇1月17日

ワールドカフェ形式による協議会

講師：三鷹の森学園三鷹市立高山小学校

校長 吉村 達之 先生

◇2月7日

本年度の成果と課題、来年度の活動についての協議

III. 成果と課題

ICTの活用する方法について、様々な先生方のアイデアを聞き、実際に授業に取り入れることができた。言語活動について具体的に考えることができ、授業内の活動を「目的・場面・状況」の設定を大切にしていくことを今後の課題として捉えている。

ICTの活用についてはまだまだ多くの可能性があるため、小・中でアイデアを共有してより効果的に活用していく。

(第六中学校教諭 中林 拓 記)

青 梅 市

I. 研究主題

「主体的に学習に取り組む態度」を見取るための指導方法の研究

II. 研究の経過

◇5月10日 全体会及び各研究部会

全体会講師：東京都教育庁指導部主任指導主事 斎藤 圭祐 先生

講演：「主体的に学習に取り組む態度」を見取るための指導方法の研究により迫る授業中での見取り方について

◇6月15日 研究授業及び協議会

授業者：泉中学校

近藤 正浩 主任教諭

相川 優里 教諭

永田 誠二 教諭

講師：福生市立福生第一中学校指導教諭 寺沢 陽子 先生

◇8月28日 一斉研究部会

講師：福生市立福生第一中学校指導教諭 寺沢 陽子 先生

講演：「主体的に学習に取り組む態度」を見取るための指導方法の研究

◇9月21日 研究授業及び協議会

授業者：第二中学校 小林 賢治 教諭

吉田 周平 教諭

関根 晴日 教諭

◇10月25日 研究授業及び協議会

授業者：第一中学校

三浦 有希 主任教諭

塩野 景子 主任教諭

内山 彩圭 教諭

講師：福生市立福生第一中学校指導教諭 寺沢 陽子 先生

講演：「主体的に学習に取り組む態度」を見取るための指導方法の研究

◇11月1日 オンライン研究授業

授業者：新町中学校

黒木 宜子 主任教諭

III. まとめ

年4回の研究授業を行うとともに、バックワードデザインで授業を構成することの大切さを学ぶことができた。

(泉中学校校長 神田 哲男 記)

府 中 市

I. 研究主題

「実践的な指導力の向上～やりとりを中心とした授業を目指して～」

II. 研究の経過

◇4月12日 部員総会

自己紹介・研究主題・年間研究計画等

◇5月10日 ワークショップ

「ALTとのチームティーチングについて」(株)ボーダーリンク様

◇8月23日 TOKYO GLOBAL GATEWAY GREEN SPRINGS 体験会

◇9月6日 研究授業

授業者：府中第一中学校

梅本 かおる 教諭

講師：中野区立中野東中学校

井上 智絵 先生

◇10月12日 ワークショップ

「Fuchu English Villageの活動共有と実施報告」(株)ボーダーリンク様

◇11月8日 ワークショップ

「やりとりを通した語彙力向上のための帯活動例」(株)ボーダーリンク様

◇1月24日 研究授業

授業者：浅間中学校

大矢 由季 主任教諭

講師：東京都教育庁指導部

義務教育指導課統括指導主事

早川 裕之 先生

◇2月7日 研究発表会

◇3月6日 役員の引継ぎ

(府中第三中学校主任教諭 中山 千佳 記)

昭 島 市

I. 研究主題

「スピーキング力を育成するための授業改善」

II. 研究の経過

- ◇ 4月12日（水） 総会・教科部会
・部長校・研究授業校の確認
- ◇ 5月10日（水） 教科部会
・研究主題の設定について協議
- ◇ 9月9日（土）
「未来をひらく発表会」にてスピーチコンテストを実施
- ◇ 10月11日（水） 研究授業
内 容：研究授業、協議及び指導教諭による指導講評
授業者：福島中学校 谷久 彰英 教諭
齊藤 富江 教諭
内 容：Take Action! Talk 4
「道順を教えてくださいませんか」
NEW CROWN ENGLISH
SERIES 3
講 師：調布市立第五中学校
指導教諭 加藤 真由子 先生
- ◇ 1月17日（水）講演会
- ◇ 2月7日（水）年度のまとめ

III. まとめ

- ・研究授業をもとにした、生徒の発話を引き出すのための方策について協議
- ・スピーキング力向上のため、ESAT-J対策をもとにした具体的な授業アイデアの提示
- ・パフォーマンステストの効果的な方法及び評価方法の具体例の提案
- ・東京グローバル育成計画の理解、英語教育を通して育成すべき人物像の確認
- ・授業に彩りを与える授業ツールの活用方法の紹介

（瑞雲中学校教諭 末安 真 記）

調 布 市

I. 研究主題

「生徒の主体的かつ協働的な学びを大切にした授業づくり」

～グローバル人材育成を目指して～

II. 研究の経過

1年間を通じ、北原延晃先生（上智大学文学部英文学科・愛知淑徳大学交流文化学部非常勤講師）に指導・助言をいただきながら研究を進めた。

- ◇ 5月10日（水）
研究テーマ及び年間研究計画の提案
会 場：第七中学校
- ◇ 6月7日（水）
講師によるマイクロティーチング①
会 場：第五中学校
- ◇ 10月4日（水）研究授業・小中合同研修
授業者：佐藤 真理子 教諭
会 場：深大寺小学校
- ◇ 11月1日（水）研究授業・小中合同研修
授業者：齊藤 宏次朗 教諭
会 場：第八中学校
- ◇ 1月17日（水）研究まとめ
講師によるマイクロティーチング②
会 場：第五中学校

III. 成果と課題

教師中心から生徒中心の授業へ、「何を教えるか」から「何を学ぶか」へ、教師の意識が変わることで授業が変わり生徒にも変容が見られた。外国語科教員の使命の一つは、世界に目を向け、人々とより良い関係を築いて、平和な世界を作ろうと努力するグローバル人材の育成であると考え。生徒たちが世界の人々と心を通わせ、通じ合える力を身に付けられるよう、主体的かつ協働的に学ぶ外国語教育について実践を積み、これからも授業改善を継続する。

（第五中学校指導教諭 加藤 真由子 記）

町 田 市

I. 研究主題

「学びに向かう力を育むための体系的な指導と評価」

II. 研究の経過

◇4月12日 第1回一斉部会

内 容：組織作り
研究主題の設定
年間活動計画

会 場：町田第一中学校

◇8月25日 夏季研修会

会 場：武蔵岡中学校

講 演：「即興で話す力を育成するための3年間を見通した指導と評価」と「主体的に学習に取り組む態度の評価」

講 師：都留文科大学非常勤講師・東京女子大学非常勤講師
本多 敏幸 先生

◇10月25日 第2回一斉部会

内 容：研究授業・協議・講演

会 場：南成瀬中学校

授 業 者：田村 健二 主任教諭

授業内容：Here We Go! 3

Unit 6 The Chorus Contest

講 演：「学びに向かう力を育むための体系的な指導と評価」

講 師：都留文科大学非常勤講師・東京女子大学非常勤講師
本多 敏幸 先生

◇1月24日 第3回一斉部会

内 容：研究のまとめ
次年度の主題の設定

(木曽中学校主任教諭 小関 淳子 記)

小 金 井 市

I. 研究主題

「インプットからアウトプットへ技能統合型の授業における個別最適・協働的な学びの指導と評価に関する研究」

II. 研究の経過

◇4月19日 組織決め、テーマ決め
今後の計画作成

◇6月7日 第1回研究授業

授業者：松隈 ゆり 教諭（南中学校）
研究協議

◇10月4日 第2回研究授業

授業者：栄藤 辰久 教諭（東中学校）
研究協議

◇11月8日 ワークショップ

講 師：小金井第二中学校
主任教諭 谷田 啓 先生

◇1月17日 講演「今年度の研究主題に基づく授業および評価」

講 師：国分寺市立第十小学校
非常勤教員 相沢 秀和 先生

◇2月7日 研究発表会(宮地楽器ホール)

III. まとめ

英語の授業においては一連の活動の流れと技能の関連性を熟慮することが重要だ。研究授業での課題点は、技能のシフトにおいて教師が具体的な題材や例示を示せなかった点、協働的な学びを促進する仕掛け作りができなかった点が挙げられた。生徒が題材を自分事として捉え、英文等を自分の力で整理し、要点、解釈をまとめ、それをもとに他者に伝えられるようになるための計画的な指導が必要である。

(小金井市立南中学校 安藤 俊子 記)

小平市

I. 研究主題

「ICTを活用した主体的な学びの充実」

II. 研究の経過

◇4月19日 教科等研究会総会

内 容：第1回英語科部会

組織づくり、研究主題の設定、
研究計画の作成

◇7月28日 夏季研修会

(小平第六中学校)

講 師：筑波大学附属中学校

教諭 高杉 達也 先生

講 演：ICTを活用した主体的な学びの
充実

内 容：主体的な学びにおいて、生徒が
自立して行動する力を育成する
ことが大切である。その充実
の為にICTを活用し、自分のパ
フォーマンスを記録し、反省し、
次の学習に生かすことが大切で
あることを学んだ。

◇9月6日 教科等研究会

会 場：花小金井南中学校

授業者：東條 亜紀 教諭

対 象：中学1年生

単 元：New Crown1 Lesson 3 GET
Part 3 “Our New Friend”

講 師：筑波大学附属中学校

教諭 高杉 達也 先生

内 容：ICTを活用した授業においても、
生徒に考えさせ、振り返りをす
る時間を与えることが大切であ
る。また情報を与えすぎないこ
とを学んだ。

III. 成果と課題

研修を通して、最新のICTを活用した授
業実践を学ぶことできた。一方、教員が学
んだ知識を生徒に還元し、主体的な学びを
充実させる授業をどのように実践してい
くかについては、まだ検討の余地がある。

(小平第六中学校教諭 山川 史 記)

日野市

I. 研究主題

「ICTを活用した個別最適化の授業」

～教員の協働省察に着目して～

II. 研究の経過

◇5月10日 中教研総会：組織作り

◇6月20日 研究授業：大坂上中学校
授業者：菊池 雄大 教諭(中学2年生)

Here We Go! 2 Unit3

「夏休みの予定は」

講 師：日野市教育センター研修部

竹村 きよみ 先生

◇7月4日 研究授業：三沢中学校

授業者：藤田 狩 教諭(中学1年生)

Here We Go! 1 Unit3

「夏休みの過ごし方」

◇8月18日 夏季研修：事例報告と講演

講 師：東京家政大学教授

太田 洋 先生

各校から、個別最適化を目指す実践事例
を持ち寄り、太田先生から講評を頂いた。

◇9月7日 研究授業：平山中学校

授業者：平野 慎也 教諭(中学2年生)

Here We Go! 2 Unit6

『Work Experience』

講 師：岐阜大学准教授

瀧沢 広人 先生

◇10月4日 研究授業：平山小学校

授業者：三浦 香織 教諭(小学校6年生)

ONE WORLD Smiles Lesson 5

講 師：三鷹市立第七小学校

小林 万里子 指導教諭

◇11月15日 講演会 オンライン開催

講 師：横浜創英中学高等学校校長補佐

山本 崇雄 先生

『教えない授業の始め方』等の著書で知
られる山本先生から、真に個別最適化さ
れた授業実践についてお話をうかがった。

◇12月10日 研究発表に向けての検討会

1月16日 研究発表会打ち合わせ

2月14日 日野市研究発表会

III. まとめ

本研究を通じて、個別化を目指す様々な
取組を共有することができた。その一方で、
ICT使用の有無に関わらず、生徒が自ら学
ぶ授業を実践する必要性を強く感じた。

(日野第二中学校主任教諭 佐藤 真雄 記)

東 村 山 市

I. 研究主題

「適正で信頼される評価のために」

II. 研究の経過

◇4月12日 統一部会

◇5月10日 定期総会

◇6月7日 ALT活用事例ワークショップ

講 師：ALT委託業者

(株) ハートコーポレイション

伊藤 由紀子 様

◇7月5日 評価についての事例研究

◇7月28日 講演会

「学習指導要領下における適正な評価について～効果的なフィードバックと信頼される評価のために～」

講 師：国立政策研究所 総括研究官

山森 光陽 先生

◇9月6日 講演会についての研究協議

具体的な評価項目や評価方法について

◇10月4日 研究授業

授業者：中村 恵 主任教諭

分部 咲織 主任教諭

山内 晶子 主任教諭

◇1月10日 定期テスト、評価についての事例研究

◇2月7日 研究発表会

◇3月6日 R5年度のまとめと新年度に向けて

III. まとめ

7/28講演会、10/4研究授業を中心に、現行の学習指導要領の趣旨に基づいた教育活動の在り方と、信頼性・妥当性の高い評価について研究を深め、実践的な研究協議を行うことができた。

(第一中学校主任教諭 山内 晶子 記)

国 分 寺 市

I. 研究主題

「個別最適な学びと協働的な学び

— 一人一台端末の視点から —」

II. 研究の経過

◇4月12日 一斉部会

・研究主題決定

・年間活動計画の確認

・夏季研修会の日程、内容の確認

◇6月7日 講演会

講 師：第五中学校

指導教諭 前川 卓哉 先生

テーマ：個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実～ICT活用の視点から～

◇8月8日 一斉部会

・研究授業内容の検討

・定期考査に関する情報交換

・2学期授業内容検討

◇10月4日 研究授業

授業者：第四中学校 堂垣 真歩 教諭

題材名：NEW CROWN English Series 3
Project 2 国際交流イベントに
出展しよう

◇1月10日 一斉部会

・研究紀要最終確定

・次年度の研究テーマ原案検討

III. まとめ

一人一台端末を活用したことで、生徒が自身の興味・関心や習熟度に合った題材を選択して主体的に学習内容に取り組むことができた。

(第二中学校主任教諭 野中 将人 記)

国 立 市

I. 研究主題

「主体的にコミュニケーション能力を高めようとする児童・生徒の育成」

II. 研究の経過

◇ 4月26日（水）

組織編成・主題設定

◇ 5月24日（水）

6月研究授業指導案検討

◇ 6月28日（水）

研究授業

授業者：国立第一中学校

兼近 優歩 教諭

講 師：玉川大学

名誉教授 佐藤 久美子 先生

◇ 7月21日（金）

11月公開授業指導案検討①

◇ 9月6日（水）

11月公開授業指導案検討②

◇ 11月8日（水）

公開授業

授業者：国立第三小学校

星野 理 主任教諭

ALT 栗城 明子

講 師：玉川大学

名誉教授 佐藤 久美子 先生

◇ 1月17日（水）

研究授業の振り返り

研究紀要作成協議

（国立第一中学校教諭 兼近 優歩 記）

福 生 市

I. 研究主題

「主体的に学び続ける児童・生徒の育成」
～義務教育9年間で育む資質・能力を共有した授業実践を通して～

II. 研究の経過

◇ 4月19日

役員選出

部会取組方向・取組内容決定

年間計画作成

◇ 5月10日

研究授業指導案検討

◇ 6月21日

研究授業Ⅰ：福生第六小学校

授 業 者：井伊 博政 教諭

内 容：「I can jump high.」

講 師：白梅学園大学 子ども学部

准教授 執行 智子 先生

◇ 8月24日

研究授業指導案検討

◇ 10月4日

研究授業Ⅱ：福生第二中学校

授 業 者：内堀 昭江 教諭

内 容：「Universal Design」

講 師：十文字学園女子大学

教育人文学部 児童教育学科

教授 林 宣之 先生

◇ 2月7日

研究報告会

III. まとめ

小学校と中学校の教員が協議し、授業づくりをしたこと、研究授業を踏まえ、協議会や研修会の場を共有し、本市の外国語教育の課題を分かち合うといった「交流」をもてたことが大きな成果といえる。今後も指導法や学習内容、教材開発などの連携をしていく。

（福生第一中学校指導教諭 寺沢 陽子 記）

狛 江 市

I. 研究主題

「対話力を重視した実践的な学びの実現
～指導と評価の一体化を目指して」

II. 研究の経過

◇5月10日 英語部会・定期総会

研究主題設定、組織作り、研究授業者の
決定

◇9月27日 英語部会

- ・研究授業の確認
- ・意見交換
 - *ALTの活用について
 - *「主体的に学習に取り組む態度」の
評価材料について
 - *帯活動について
 - *パフォーマンステストの評価規準に
ついて
 - *スピーキングテスト (ESAT-J) に
向けて
 - *各Unitのゴール設定について

ほか

◇1月12日 研究授業・協議会

会 場：狛江第二中学校
授業者：宮田 孝良 主任教諭
対 象：2年A・B組少人数
単 元：Here We Go English Course 2
Unit 7 Amazing Australia
講 師：東京都教員研修センター
教育開発課 指導主事
高田 奈々 先生

◇2月14日 研究報告会

(狛江第二中学校主任教諭
福長 あおい 記)

東 大 和 市

I. 研究主題

「即興的に英語でコミュニケーションを
取れる生徒の育成～オンライン英会話等
の場面で、日本語を効果的に活用しながら
英語で考える活動を通して～」

II. 研究の経過

◇5月10日 教育研究会

内 容：研究主題の検討、活動計画の作成

◇7月21日 夏季研修会（講演）

講 師：GRASSグループ株式会社
岡田 海樹 様

内 容：オンライン英会話の効果的な活
用に向けて

◇10月4日 研究授業

会 場：第一中学校
授業者：高橋 一生 教諭
内 容：反転授業方式を使ったWeblio
英会話
指導・講評：

第二中学校 校長
岩崎 浩示 先生

◇11月22日 研究授業

会 場：第四中学校
授業者：谷川 研嗣 主任教諭
内 容：即興性を重視した場面における、
スピーキング力向上に向けて
指導・講評：第二中学校 校長
岩崎 浩示 先生

III. 成果と課題

オンライン英会話レッスンを計画的に進
めていくことで、Speaking能力向上に向
けた指導ができることを再認識できた。

即興性が求められる場面でのSpeaking
能力を身に付けるためには、model文に十
分触れさせながら、Writing活動とのバラ
ンスも考え、計画的に指導する必要がある
ことを確認できた。

(第一中学校主任教諭 武田 秀彦 記)

清 瀬 市

I. 研究主題

「言語の使用場面を意識した『やり取り』
の在り方」

II. 研究の経過

◇ 4月19日 清瀬市教育研究会

会 場：清瀬第二中学校

内 容：研究主題の検討・決定
年間計画の確認
各校の情報交換

◇ 6月28日 清瀬市教育研究会

会 場：TOKYO GLOBAL GATEWAY
GREEN SPRINGS（立川）

内 容：施設・プログラムについて説明
プログラムの体験
施設見学

TOKYO GLOBAL GATEWAY GREEN
SPRINGS（立川）に訪問し、職員の方
から施設やプログラムについての説明を
受けた。実際に教員を生徒役としてプロ
グラムの体験を行った後に、施設内の見
学を行った。

◇ 10月25日 清瀬市教育研究会

会 場：清瀬第四中学校

内 容：授業で活用するアクティビティ
について

講 師：英語インストラクター
前田 喜久子 様

英語インストラクター 前田 喜久子 様
を講師としてお招きし、授業に活かすこ
とができるアクティビティを紹介して頂
いた。実際に教員を生徒役としアクティ
ビティを体験した。

（清瀬第四中学校教諭 山本 祐太 記）

東 久 留 米 市

I. 研究主題

「指導と評価の一体化を目指した指導方
法の改善 ～日々の授業で心掛けるべき
こと～」

研究内容

- 1 振り返り活動を含めた、生徒の主体
的な学びを促す授業1時間の構成
- 2 スピーキングテストを想定した発話
の実践

II. 研究の経過

◇ 5月10日 市授業改善研 （全体会・分科会）

研究主題・情報交換

◇ 6月14日 市授業改善研 （分科会） 指導案検討

◇ 7月12日 研究授業 中央中学校 2年生 授業者：堀内 美里 主任教諭 講 師：元板橋第二中学校長 大沼 文雄 先生

◇ 9月13日 研究授業 久留米中学校 1年生 授業者：加藤 陽子 教諭 講 師：元板橋第二中学校長 大沼 文雄 先生

◇ 2月7日 市授業改善研 研究報告

（大門中学校主任教諭 加藤 広太郎 記）

武蔵村山市

I. 研究主題

「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業・教育活動の在り方」

II. 研究の経過

◇4月19日 中教研第1回部会

- ・自己紹介
- ・研究主題設定
- ・組織編制
- ・年間計画

◇11月1日 中教研第2回部会

TOKYO GLOBAL GATEWAY 見学会

- ・施設見学
- ・質疑応答

◇2月7日 中教研第3回部会

実践報告会

テーマ：「思考・判断・表現力を高めるための指導の工夫・評価方法について」

(小中一貫校村山学園教諭

丸山 浩司 記)

多摩市

I. 研究主題

「スピーキング力をつける日頃の指導法について学ぶ」

II. 研究の経過

◇5月10日(水) 第1回

内 容：自己紹介、今年度の活動方針

◇6月14日(水) 第2回

内 容：ビデオによる研究授業と協議会
授業者：鶴牧中学校

鈴木 美帆 主任教諭

講 師：大東文化大学 外国語学部教授
静 哲人 先生

講 演：スピーキング力をつける日頃の
発音指導について

◇11月8日(水) 第3回

講 師：文京区立茗台中学校

校長 西貝 裕武 先生

講 演：東京都でスピーキングテストを
高校入試に取り入れていること
を受けて、「話すこと」の指導
と評価方法について

(和田中学校主任教諭 井田 あや子 記)

稲 城 市

I. 研究主題

「タブレット端末を活用した効果的な学習法の提案」

II. 研究の経過

- ◇ 4月12日 一斉部会
場 所：稲城第四中学校
内 容：研究主題と年間活動計画の作成
- ◇ 5月10日 事前授業研修
場 所：稲城第四小学校
内 容：授業でのICT活用事例の紹介
発表者：宮本 知瑛 先生
- ◇ 8月23日 指導案検討
場 所：稲城第四中学校
内 容：研究授業の指導案検討
- ◇ 9月13日 研究授業・協議会
場 所：若葉台小学校
内 容：第5学年「She is a cook.」
授業者：亀井 香菜子 先生
- ◇ 10月11日 研究授業・協議会
場 所：稲城第一中学校
内 容：第3学年
「Things to do in Japan. /
Take Action! Listen 4」
大草 創平 先生
佐藤 朋絵 先生
- ◇ 1月17日 研究のまとめ
場 所：稲城第四中学校
- ◇ 2月7日 研究発表会
場 所：稲城市立公民館ホール

(稲城第三中学校教諭 若穂岡 翔 記)

羽村市・西多摩郡

I. 研究主題

「各校の実態に応じたICT機器の効果的な活用方法」

II. 研究の経過

- ◇ 5月10日 (水) 一斉部会
会 場：平井中学校
内 容：本年度の研究主題の決定
役員選出
- ◇ 11月1日 (水) 一斉教科部会
会 場：平井中学校
内 容：研究授業 協議会
授業者：平井中学校
服部 直子 教諭
講 師：埼玉学園大学准教授
奥住 桂 先生
- ◇ 2月7日 (水) 全体研修会
会 場：平井中学校
内 容：各教科研究報告会

III. 成果と課題

成 果

タブレット等のICTを利用した学習は学習効率を上げることができる。また、ICT機器に限らず黒板や模造紙等従来のツールも学んだことを全ての生徒で共有するのに有効である。これらを活用し語彙力、文法力の定着を図ることができたことが成果である。

課 題

ICTを有効活用できればよいが、翻訳機能などを使用し、考えることをせず英文を作成できてしまう部分は課題である。

(大久野中学校主幹教諭 荒川 隆博 記)

あきる野市

I. 研究主題

『目的・場面・状況に応じて生徒が主体的に表現する力を育む授業づくり』

II. 研究の経過

◇4月26日（水）市中教研一斉部会

会 場：東中学校

活動内容：1 三役決定

2 今年度の研究主題決定

3 一斉授業研究会の予定

◇6月7日（水）市中教研英語部会

会 場：増戸中学校

授 業 者：齋藤 恭子 主任教諭

瀬沼 優樹 教諭

授業内容：Unit 3『海外からの転校生』

講 師：羽村市立羽村第二中学校

副校長 金子 敏治 先生

◇10月4日（水）小中合同研究会

会 場：草花小学校

授 業 者：青木 ゆりか 教諭

授業内容：CROWN Jr.6『買い物』

講 師：あきる野市立増戸小学校

校長 永曾 久美子 先生

◇1月24日（水）市中教研英語部会

会 場：西中学校

授 業 者：山田 将史 教諭

授業内容：Unit 7『データを比較しよう』

講 師：東大和市立第二中学校

校長 岩崎 浩示 先生

III. 成果と課題

英語部会や小中合同研究会で、情報を交換、共有し、研究主題を深めた。

小学校では、中学校で指導する会話表現に触れている。今後も小中連携を図り、生徒が主体的に英語で表現する力を育む授業を研究していくことが課題である。

（秋多中学校主幹教諭 和久利 幸子 記）

西 東 京 市

I. 研究主題

「コミュニケーション活動のさらなる充実～現行学習指導要領及び小中一貫教育の実施のもと～」

II. 研究の経過

◇5月10日 第1回部会

会 場：保谷中学校

活動内容：1 組織の決定

2 研究テーマの決定

3 年間活動内容の決定

◇11月8日 第2回部会

①研究授業

会 場：柳沢中学校

授業者：上野 裕也 教諭（3学年）

单元名：Unit 5 A Legacy for Peace

②研究協議会

③講演

「コミュニケーション活動のさらなる充実」

講 師：東京学芸大学 准教授

白倉 美里 先生

④質疑応答

⑤情報交換

III. 成果と課題

部会では、表現の幅を広げる言語活動の指導方法や、ペアからグループへと関わり合いの変化がもたらす、より充実した言語活動のあり方、タブレット活用での注意点など、情報を交換・共有し、研究主題を深めた。

次年度は、さらに小中連携を意識した言語活動の工夫について研究を進めたい。

（田無第三中学校主幹教諭 堀 恭子 記）

大 島 町

I. 研究主題

「パフォーマンステストの在り方」

II. 研究の経過

◇4月12日 研究協議会

会 場：第一中学校

活動内容：R5年度活動計画の作成

◇5月17日 研究協議会

会 場：第一中学校

活動内容：研究資料の共有（パフォーマンステスト時における評価の仕方について協議）

◇10月11日 研究協議会

会 場：第一中学校

活動内容：研究授業の指導案検討

◇11月22日 研究授業

会 場：第二中学校

授 業 者：新垣 智也 教諭

Outeiral Andrew ALT

授業内容：第1学年 Lesson 5

学校生活や行事を紹介する
メールを書こう

◇1月18日 研究授業

会 場：第一中学校

授 業 者：安木 美帆

授業内容：第3学年 Unit 6

“Imagine to Act”

III. まとめ

パフォーマンステストを通して、どのように学習評価を行っていくべきか、これまでの授業実践や研究授業を通して研究主題を深めた。

各校の取組、実践方法を踏まえ、今後の大島の英語力向上に向けて取り組んでいく。

（第二中学校教諭 新垣 智也 記）

八 丈 町

I. 研究主題

「コミュニケーション能力を活用できる
児童・生徒の育成」

～効果的な言語材料導入の工夫～

II. 活動の経過

◇5月10日 第1回部会

研究主題、活動計画、組織づくり、
研究授業担当地区決め、物品購入検討

◇11月15日 第2回部会

①研究授業

会 場：三根小学校

対 象：第4学年

授業者：東京学芸大学 教授

柏谷 恭子 先生（T1）

森 和哲 主任教諭（T2）

②協議

③情報交換

◇1月17日 第3回部会

①研究授業

会 場：三原中学校

対 象：第3学年

授業者：土居 由起子 主任教諭

Christopher Stempel ALT

②協議

③年度末反省・まとめ

④情報交換

III. 取組の工夫

◆小中合同での研修部会を組織して研修を実施

◆一斉テストとして英検IBAを各校で実施し、情報を共有

（三原中学校 副校長 石橋 弘毅 記）

令和5年度 中英研事業報告

㊦ 対面開催 ㊧ オンライン開催

- 1 6月1日㊦㊧ 役員会
 - ・役員組織等の確認
 - ・年間事業計画の検討
 - ・中英研定期総会に向けて 他
- 2 6月13日㊦㊧ 定期総会
 於：葛飾区立常盤中学校
 4年ぶりの対面型開催となった。
 - ・令和4年度事業報告・決算報告
 - ・令和4年度会計監査報告
 - ・新役員の承認
 - ・5年度行動目標の承認
 - ・5年度事業計画・予算の承認
- 3 6月27日㊧ 第47回関東甲信地区中学校英語教育研究協議会栃木大会第1回理事研修会
- 4 7月23日㊧ 全英連夏季全国理事会
- 5 8月1日㊦ 8月4日㊧ 研究部
 夏季ワークショップ
 1日 於：大田区立志茂田中学校
- 6 8月21日㊦㊧ 事業部
 夏季ワークショップ
 於：千代田区立九段中等教育学校
- 7 8月23日㊦ 調査部
 テストづくりワークショップ
 於：千代田区立九段中等教育学校
- 8 8月23日㊦ プロジェクトチーム部
 夏季ワークショップ
 於：墨田区立吾嬬立花中学校
- 9 10月2日㊧ 役員会
 - ・夏季ワークショップ等報告
 - ・英語学芸大会の運営について 他

- 10 10月6日㊧ 第62回大都市公立中学校英語教育研究会連絡協議会広島大会
- 11 10月10日から11月10日まで㊧ 事業部
 第76回東京都中学校英語学芸大会（オンライン開催の部）
- 12 10月30日㊧ 第47回関東甲信地区中学校英語教育研究協議会栃木大会第2回理事研修会
- 13 11月10日㊦㊧ 第47回関東甲信地区中学校英語教育研究協議会栃木大会
- 14 11月17日 出版部
 「都中英研だより」第77号 発行
- 15 12月26日 事業部
 第76回東京都中学校英語学芸大会（集合開催の部）
 於：たましんRISURUホール
- 16 2月7日から3月29日まで 令和5年度東京都教職員研修センター
 教育課題研究発表会展示発表
- 17 2月9日 事業部
 第38回授業力アップ研修会
 於：町田市立鶴川中学校
- 18 2月15日㊦ プロジェクトチーム部
 研究授業・冬季研修会
 於：町田市立鶴川第二中学校
- 19 2月22日 研究部
 公開授業・研究発表会
 於：渋谷区立松濤中学校
- 20 2月26日㊧ 役員会
 - ・令和5年度の活動のまとめ
 - ・令和6年度事業計画について 他
- 21 3月1日 出版部
 「中英研会報」第82号 発行

（文責 総務部長 板垣 繁）

東京都中学校英語教育研究会会則

第1章 総 則

- 第1条 本会は東京都中学校英語教育研究会と称する。
- 第2条 本会の事務所は会長指定の経理部長在籍校の所在地に置く。
- 第3条 本会は東京都中学校の英語教育関係者を会員とする。

第2章 目的及び事業

- 第4条 本会は中学校英語教育に関する事項を研究し、会員の識見の向上に努めると共に、英語教育の振興を図ることを目的とする。
- 第5条 本会は前条の目的を達成するために、次の事業を行う。
1. 各種研修会の開催（研修会、発表会、講演会等）
 2. 調査活動（コミュニケーションテストの作成とその分析、調査活動等）
 3. 研究活動（英語教育に関わる基礎的かつ実践的な課題等）
 4. 各種英語教育団体との連絡
 5. 機関誌発行、本会の目的達成に必要な事業

第3章 役員及び幹事

- 第6条 本会には次の役員および幹事をおく。
1. 会長1名
 2. 副会長若干名
 3. 部長各部ごと1名
 4. 副部長各部ごと若干名
 5. 会計監査2～3名
 6. 幹事各区、市ごとに1名
- 第7条 役員の選出は次のとおりとする。
1. 会長・副会長は役員会の推薦により、総会の承認を得なければならない。
 2. 部長・副部長は役員会の推薦により、会長が委嘱する。
 3. 会計監査は役員会の推薦により、会長が委嘱する。
- 第8条 役員の任務は次のとおりとする。
1. 会長は本会を代表し、会務を総括する。
 2. 副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときはその職務を代行すると共に、各部を分担する。
 3. 部長は担当副会長と協議の上、部会を招集し、会務を執行する。
 4. 幹事は本部と各地区との連絡にあたる。
 5. 事務局は総務部が担当し、事務局長は総務部長があたる。
 6. 会計監査は会計の監査を行い、その結果を総会に報告する。

第9条 役員の任期は1年とする。ただし再任を妨げない。

第10条 本会に相談役、参与及び顧問をおくことができる。

1. 相談役はOB会長及び副会長より、参与は現職校長より役員会の推薦により会長が委嘱する。
2. 顧問は英語科出身の指導主事より会長が委嘱する。

第4章 会 議

第11条 会議は次のとおりとする。

1. 総 会

毎年1回会長が招集し、会務の報告、役員の人事、予算、決算等を審議し、決定する。ただし、必要がある場合は臨時に開くことができる。

2. 役員会

会長・副会長・部長をもって構成し、必要に応じて副部長・会計監査を加え、会長の諮問機関とする。

3. 幹事会

役員・幹事をもって構成し、学期1回以上例会を開き、会務を執行する。

4. 部 会

[総務部] 庶務・会計・渉外及び他部に属さない事項の処理

[事業部] 会の年間計画・英語学芸会・研修会、その他会長より委嘱された事業の立案・計画・推進

[調査部] コミュニケーションテスト及び英語教育に関する調査の実施

[研究部] 語彙指導などの研究活動とその普及のための広報活動、研究発表会および公開授業の開催

[出版部] 中英研だより・会報などの発行

[プロジェクト・チーム部] 英語教育に関わる今日のかつ実践的な課題についての研究の推進

第5章 会 計

第12条 本会の会費は東京都中学校教育研究会よりの交付金をもってあてる。

第13条 本会の経費は会費およびその他の収入による。

第14条 本会の予算・決算は総会の承認を得なければならない。

第15条 本会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

第6章 付 則

第16条 本会則は昭和60年4月1日より実施する。

第17条 本会則の変更は総会の承認を得なければならない。

第18条 細則は幹事会で定めることができる。

※改定 第5条2、3及び第11条4は平成17年5月19日より実施する。

※第2条及び第16条は平成30年5月10日より実施する。

令和5年度 東京都中学校英語教育研究会名簿

役 名	氏 名	所 属 校
会 長	平 岡 栄 一	葛 飾 区 立 常 盤 中 学 校
副 会 長	板 垣 繁	葛 飾 区 立 金 町 中 学 校
〃	難 波 浩 明	足 立 区 立 第 四 中 学 校
〃	西 貝 裕 武	文 京 区 立 茗 台 中 学 校
〃	柳 歆 子	大 田 区 立 雪 谷 中 学 校
〃	今 本 由美子	立 川 市 立 立 川 第 三 中 学 校
〃	佐 藤 順 一	墨 田 区 立 吾 嬬 立 花 中 学 校
〃	大 森 博	八 王 子 市 立 第 一 中 学 校
〃	横 山 達 也	八 王 子 市 立 第 六 中 学 校
総 務 部 長	板 垣 繁	葛 飾 区 立 金 町 中 学 校
経 理 部 長	難 波 浩 明	足 立 区 立 第 四 中 学 校
経 理 部 長 補 佐	赤 田 洋 一	江 東 区 立 第 二 砂 町 中 学 校
副 部 長	星 正 行	葛 飾 区 立 新 宿 中 学 校
〃	小 林 和 代	葛 飾 区 立 新 宿 中 学 校
部 員	米 岡 利 昌	葛 飾 区 立 水 元 中 学 校
〃	池 田 美 咲	葛 飾 区 立 新 宿 中 学 校
〃	平 入 聡	葛 飾 区 立 金 町 中 学 校
〃	高 山 翔	葛 飾 区 立 金 町 中 学 校
調査部担当副会長	大 森 博	八 王 子 市 立 第 一 中 学 校
調 査 部 長	荒 川 高 広	東 京 都 立 桜 修 館 中 等 教 育 学 校
副 部 長	高 瀬 ひとみ	東 京 都 立 白 鷗 高 等 学 校 ・ 附 属 中 学 校
〃	加 藤 真 由 子	調 布 市 立 第 五 中 学 校
部 員	相 澤 雄 介	練 馬 区 立 光 が 丘 第 三 中 学 校
〃	飯 島 美 樹	江 東 区 立 深 川 第 二 中 学 校
〃	石 田 千 尋	品 川 区 立 八 潮 学 園
〃	遠 藤 康 子	練 馬 区 立 貫 井 中 学 校
〃	大 木 田 陽 子	江 東 区 立 辰 巳 中 学 校
〃	大 澤 陽 子	国 立 市 立 国 立 第 二 中 学 校
〃	大 竹 希 依 子	中 野 区 立 明 和 中 学 校
〃	鹿 野 さ や か	八 王 子 市 立 第 一 中 学 校
〃	上 水 謙 治	小 平 市 立 小 平 第 五 中 学 校
〃	榎 野 真 弓	中 野 区 立 第 二 中 学 校
〃	久 保 田 航	墨 田 区 立 墨 田 中 学 校
〃	黄 俐 嘉	千 代 田 区 立 九 段 中 等 教 育 学 校
〃	小 山 寛 孝	町 田 市 立 南 中 学 校

役 名	氏 名	所 属 校
部 員	斎 藤 基	八王子市立 第 五 中 学 校
〃	佐 藤 航	東大和市立 第 五 中 学 校
〃	白 井 靖 子	江 東 区 立 深 川 第 八 中 学 校
〃	柴 野 泰 行	江 東 区 立 亀 戸 中 学 校
〃	鈴 木 美 帆	多 摩 市 立 鶴 牧 中 学 校
〃	高 橋 翔 太	多 摩 市 立 諏 訪 中 学 校
〃	田 所 毅	羽 村 市 立 羽 村 第 一 中 学 校
〃	丹 生 幸 宣	西 東 京 市 立 田 無 第 四 中 学 校
〃	坪 内 英 津 子	八 王 子 市 立 四 谷 中 学 校
〃	永 井 剛	武 蔵 野 市 立 第 一 中 学 校
〃	中 村 大 樹	練 馬 区 立 石 神 井 西 中 学 校
〃	幡 野 洋 子	日 野 市 立 大 坂 上 中 学 校
〃	樋 口 はる 菜	羽 村 市 立 羽 村 第 一 中 学 校
〃	藤 本 真 弓 美	墨 田 区 立 寺 島 中 学 校
〃	星 雄 介	西 東 京 市 立 田 無 第 二 中 学 校
〃	前 田 秋 輔	東 京 都 立 桜 修 館 中 等 教 育 学 校
〃	松 村 祐 輔	江 戸 川 区 立 松 江 第 五 中 学 校
〃	松 本 緑	足 立 区 立 江 南 中 学 校
〃	丸 山 敬 子	大 田 区 立 矢 口 中 学 校
〃	宮 崎 太 樹	日 野 市 立 日 野 第 一 中 学 校
〃	吉 田 恵	東 京 都 立 白 鷗 高 等 学 校 ・ 附 属 中 学 校
〃	吉 原 脩 平	西 東 京 市 立 田 無 第 一 中 学 校
〃	渡 邊 愛 沙 美	日 野 市 立 七 生 中 学 校
事業部担当副会長	西 貝 裕 武	文 京 区 立 茗 台 中 学 校
事 業 部 長	横 山 達 也	八 王 子 市 立 第 六 中 学 校
副 部 長	稲 葉 高 広	町 田 市 立 鶴 川 中 学 校
〃	前 川 卓 哉	国 分 寺 市 立 第 五 中 学 校
〃	大 屋 剛	練 馬 区 立 田 柄 中 学 校
〃	小 山 千 景	葛 飾 区 立 小 松 中 学 校
〃	亀 田 洋 斉	東 京 都 立 青 山 高 等 学 校
〃	黄 俐 嘉	千 代 田 区 立 九 段 中 等 教 育 学 校
部 員	相 沢 隆 二	目 黒 区 立 目 黒 中 央 中 学 校
〃	大 竹 希 依 子	中 野 区 立 明 和 中 学 校
〃	川 越 智 子	北 区 立 飛 鳥 中 学 校
〃	小 川 史 哲	八 王 子 市 立 別 所 中 学 校
〃	宮 内 瞭	小 金 井 市 立 小 金 井 第 一 中 学 校

役 名	氏 名	所 属 校
部 員	山 内 正 治	八王子市立 川 口 中 学 校
〃	川 澄 陽 子	大 田 区 立 大 森 第 六 中 学 校
〃	河 野 真由子	東 京 都 立 武 蔵 高 等 学 校
〃	遠 藤 貴 裕	町 田 市 立 鶴 川 中 学 校
〃	太 田 湖 希	葛 飾 区 立 水 元 中 学 校
〃	田 島 大 介	葛 飾 区 立 奥 戸 中 学 校
〃	舩 谷 明沙季	町 田 市 立 鶴 川 中 学 校
〃	等々力 正 伸	葛 飾 区 立 常 盤 中 学 校
研究部担当副会長	板 垣 繁	葛 飾 区 立 金 町 中 学 校
研 究 部 長	溪 内 明	文 京 区 立 本 郷 台 中 学 校
副 部 長	前 田 宏 美	東 京 都 立 立川国際中等教育学校
〃	高 杉 達 也	国 立 筑波大学附属中学校
〃	橋 本 晋 作	渋 谷 区 立 松 濤 中 学 校
〃	水 嶋 諒	江 東 区 立 第 四 砂 町 中 学 校
部 員	原 田 博 子	文 京 区 立 第 十 中 学 校
〃	中 川 智 子	大 田 区 立 志 茂 田 中 学 校
〃	森 沢 俊 彦	日 野 市 立 日 野 第 三 中 学 校
〃	島 田 拓	足 立 区 立 入 谷 南 中 学 校
〃	松 野 麻里恵	港 区 立 三 田 中 学 校
〃	大 島 良 一	江 戸 川 区 立 篠 崎 第 二 中 学 校
〃	多 田 翔	江 東 区 立 第 三 砂 町 中 学 校
〃	福 島 恵 子	清 瀬 市 立 清 瀬 第 三 中 学 校
〃	一ノ瀬 麻 子	港 区 立 六 本 木 中 学 校
〃	岡 大 佑	東 京 都 立 小石川中等教育学校
〃	長谷川 眞 司	小 平 市 立 小 平 第 三 中 学 校
〃	五 井 沙 織	板 橋 区 立 高 島 第 一 中 学 校
〃	小 沼 櫻	府 中 市 立 府 中 第 六 中 学 校
担当副会長 兼出版部長	今 本 由美子	立 川 市 立 立 川 第 三 中 学 校
副 部 長	溝 口 千 里	板 橋 区 立 高 島 第 二 中 学 校
〃	兼 子 容 子	葛 飾 区 立 四 ツ 木 中 学 校
〃	鈴 木 訓 文	葛 飾 区 立 小 岩 第 四 中 学 校
〃	當 麻 忠 幸	西 東 京 市 立 ひばりが丘中学校
部 員	相 澤 史 彦	小 平 市 立 小 平 第 二 中 学 校
〃	梅 田 一 行	練 馬 区 立 大 泉 第 二 中 学 校
〃	椿 恭 子	目 黒 区 立 第 一 中 学 校
〃	福 田 貴 音	豊 島 区 立 西 池 袋 中 学 校

役 名	氏 名	所 属 校
部 員	鈴 木 咲 子	清 瀬 市 立 清 瀬 第 三 中 学 校
〃	柳 絵 未	千代田区立 九段中等教育学校
〃	岩 田 歩	調 布 市 立 第 五 中 学 校
〃	辻 賢 哲	八 丈 町 立 富 士 中 学 校
〃	深 山 朋 子	新 宿 区 立 新 宿 西 戸 山 中 学 校
〃	祖母井 千 秋	江 東 区 立 大 島 西 中 学 校
〃	浅 田 紗 織	青 梅 市 立 西 中 学 校
〃	和 田 圭 史	羽 村 市 立 羽 村 第 三 中 学 校
担当副会長 兼 P T 部長	佐 藤 順 一	墨 田 区 立 吾 嬬 立 花 中 学 校
副 部 長	佐 藤 善 明	西 東 京 市 立 ひばりが丘中学校
部 員	原 田 博 子	文 京 区 立 第 十 中 学 校
〃	小 林 博 子	豊 島 区 立 明 豊 中 学 校
〃	上 尾 栄美子	足 立 区 立 第 四 中 学 校
〃	角 田 幸 彦	足 立 区 立 蒲 原 中 学 校
〃	堀 恭 子	西 東 京 市 立 田 無 第 三 中 学 校
〃	渡 邊 英 哲	町 田 市 立 つくし野中学校
〃	飯 沼 美千代	昭 島 市 立 清 泉 中 学 校
〃	田 中 佳 奈	連雀学園三鷹市立 第 一 中 学 校
〃	本 田 耕 大	新 宿 区 立 新 宿 西 戸 山 中 学 校
〃	伊 勢 涼	葛 飾 区 立 双 葉 中 学 校
〃	渡 邊 良 亮	町 田 市 立 鶴 川 第 二 中 学 校
〃	村 山 幸 広	江 戸 川 区 立 二 之 江 中 学 校
〃	生 垣 佳 子	墨 田 区 立 吾 嬬 第 二 中 学 校
小 中 連 携	島 村 雄次郎	立 川 市 立 第 七 小 学 校
〃	畠 山 芽 含	足立区新田学園足立区立 新 田 小 学 校
〃	柳 歆 子	大 田 区 立 雪 谷 中 学 校
会 計 監 査	宮 本 猛 司	足 立 区 立 栗 島 中 学 校
〃	市 川 拓 治	足 立 区 立 第 十 中 学 校

あ と が き

ここに、令和5年度「中英研会報」第82号をお届けいたします。

本誌の発行に際しましては、文教大学 教授 阿野 幸一 先生をはじめ、多くのご執筆者の皆様にご協力いただきましたことに、心から御礼申し上げます。

また、「地区活動状況」ページの作成にあたりましては、各地区幹事の先生方には、ご多用の中、原稿の提出にご協力いただきありがとうございました。

今年度は、ここ数年、形態を変更したり規模を縮小したりしていた取組も、多くの参加者を迎えて開催され、大変活気あるものとなりました。また、コロナ禍で定着したオンライン方式と従来の集合方式を両立させた、ハイブリッドな部会やワークショップも定着したように感じます。それにより、より多くの先生方に、気軽に、そして積極的に都中英研の活動に参加していただける環境が整ってきているのではないかと思います。

「中英研だより」については、今年度、紙面での発行を止め、デジタル版のみの発行と変更をいたしました。しかし、「中英研会報」については、各校1冊ではありますが、引き続きお届けさせていただく予定です。都中英研HPからも、過去の会報も含めご覧いただけますので、そちらもどうぞご活用ください。本誌が都内各中学校の英語科教員の情報共有の場となり、英語科教員相互の連携、都の中学校英語教育の一層の充実、発展のお役に立てればと願っております。

最後になりましたが、本誌の発行にあたりご支援を賜りました多くの先生方に感謝いたしますとともに、会員の皆様の一層のご活躍をお祈りいたします。

(都中英研出版部長 今本 由美子)

都中英研 HP・Facebook の URL と QR コード

都中英研 HP では、各部の活動や研修会等のお知らせがご覧いただけます。本誌「都中英研会報」の閲覧も可能です。また、Facebook では、利用者間相互のコミュニケーションも可能です。ぜひご活用ください。

<http://www.chueiken-tokyo.org/>

<https://www.facebook.com/chueiken.tokyo/>



都中英研 HP



Facebook

※Facebookはメタプラットフォーム社の登録商標です。

都中英研会報 第82号

令和6年3月1日印刷
令和6年3月1日発行

発行者 東京都中学校英語教育研究会

代表者 平岡 栄一

発行所 東京都中学校英語教育研究会
東京都葛飾区立常盤中学校
東京都葛飾区金町2-11-1
TEL03-3607-1122

印刷所 (株) オフィス・サンライズ
東京都大田区鵜の木2-6-5
TEL(03) 5741-3146